

いま、語りつぐ

平和への願い XIII

「平和を願う市民のつどい」
「終戦記念日のつどい」及び
「平和特別講演会」の記録



宝塚市平和モニュメント「火の鳥」



“大阪駅”

学童集団疎開70年 画集「時空の旅」(成瀬國晴 画・著)より

いま、語りつぐ 平和への願い XIII

平成30年(2018年)3月発行

編集・発行 宝塚市総務部人権平和室人権男女共同参画課

宝塚市東洋町1-1 電話 0797-71-1141(代表)

宝 塚 市

発行にあたって

我が国は戦後73年目を迎えました。この間、幸いにも我が国には戦争がなく平和な社会が続いています。しかし、この平和が、未来永劫続くという保障はどこにもありません。恒久平和の実現のためには、戦争の悲惨さを語り継いでいかなければなりません。特に、戦後生まれの市民が大半を占めつつある今、次世代を担う子どもたちに、平和の大切さ、命の尊さを身近な問題として認識してもらえよう働きかけていくことが重要です。

宝塚市は、平成元年（1989年）3月7日に「非核平和都市宣言」を行い、平成15年（2003年）9月19日には「宝塚市核兵器廃絶平和推進基本条例」を施行し、これらの理念、規定に基づき、戦争や核兵器のない平和な社会の実現を願って、市民とともに毎年様々な平和事業を行っています。

平成28年度（2016年度）の平和の催しの中から、宝塚市大使でもある田辺真人さんの「平和を願う市民のつどい」での講演、山内麻奈加さんと河谷杏実さんの「終戦記念日のつどい」での朗読、宝塚市在住のイラストレーター成瀬國晴さんの「平和特別講演会」での講演を本冊子にまとめました。

平和を願う市民のつどいでは、田辺さんに、戦時中沖縄県知事であった島田叡さんの生き方を通して「命の大切さ」をお話していただきました。また、西澤慎さんには戦争体験を発表していただきました。70年以上経っても辛い思いをしている西澤さんは、今も被爆者の想いを伝える運動をされています。

平和特別講演会では、成瀬さんの貴重な学童集団疎開の体験を成瀬さんが描かれたイラストとともに話していただきました。今の子どもたちに、平和のありがたさをもっと知って欲しいと思います。

本冊子作成に当たり、西澤慎さん、田辺真人さん、成瀬國晴さんのご協力に心から感謝申し上げます。

宝塚市の素晴らしい自然と明るく穏やかな暮らしは、市民の「宝」です。この「宝」を守り、未来ある子どもたちが、二度とあの悲惨な戦火に見舞われないよう、平和への想いを胸に刻んでいただきたいと思います。

この平和冊子を一人でも多くの市民の皆様にお読みいただき、戦争と平和、命の尊さについて考える一助になることを願ってやみません。

平成30年（2018年） 3月

宝塚市長 中川智子

目 次

1 平成28年度「平和を願う市民のつどい」記録	1
第1部 ミニコンサート	1
第2部 戦争体験	3
第3部 講演会	8
2 平成28年度「終戦記念日のつどい」記録	21
平和のメッセージ『戦争のない世界になるために』	22
平和のメッセージ『本当の「平和」』	23
3 平成28年度「平和特別講演会」記録	25
第1部 ミニコンサート	25
第2部 講演会	27
4 非核平和都市宣言文	48



平和を願う市民のつどい

と き 平成28年(2016年)7月26日(火)午後2時開演

ところ 宝塚市文化施設 ソリオホール

第1部 ミニコンサート

1 出演

フルート：武村美穂子さん

ピアノ：足立麻里さん

曲名 愛のあいさつ

アメイジンググレース

マリア (ウエストサイド物語より)

合唱：宝塚すずらんエコー (指揮：武村寿子さん ピアノ：足立麻里さん)

曲名 さとうきび畑

唱歌メドレー「ふるさとの四季」より

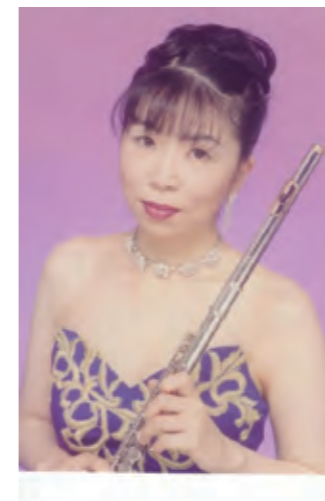
故郷

夏は来ぬ

故郷

2 プロフィール

武村美穂子 (フルート)



兵庫県立西宮高等学校音楽科を経て、京都市立芸術大学音楽学部、同大学院修了。NHK 洋楽オーディションに合格。京都芸術祭藤川賞、日本フルートコンベンション・コンクールアンサンブル部門銅賞などを受賞。

NHK-FM「土曜リサイタル」、ヤマハ新人演奏会、大阪国際室内楽フェスタ等に出演。國友重紀、山腰直弘、白石孝子、伊藤公一の各氏に師事。京都フランス音楽アカデミーにてレイモン・ギョー、フィリップ・ベルノルドの両氏に師事。アラン・マリオンマスタークラス in Japan 修了。宝塚演奏家連盟会員、VioletteLienのメンバー、ドルチェミュージックアカデミー講師。

宝塚すずらんエコー（合唱）

1979年創立。

1998年と2000年12月には、男声合唱団「アルママータ・クワイヤ」他とベガホールにてジョイントコンサートを開催。

2001年より訪問ボランティア・コンサートを行う。年間10回ほど施設等で演奏している。これまでに「県くすのき賞」「県民ボランティア活動賞」など受賞。



コンサートの様子（フルートとピアノ）



コンサートの様子（合唱）

第2部 戦争体験の発表

1 出演

発表者 西澤 慎さん
朗読・聞き手 松田栄子さん

2 プロフィール

西澤 慎

大阪市出身。昭和18年、旧満州ハルビン郊外の安達から約37kmの所にある昇平鎮に大阪昇平開拓団として父が入植。その地で11歳の時敗戦を迎える。安達、ハルビン、長春、葫蘆島を経て昭和21年10月博多に帰還する。帰還の翌日親戚を頼って広島へ。その後、宝塚に在住。兵庫県平和美術協会会長。

3 朗読

戦争はいやだ！～11歳の難民生活の回想～（西澤 慎 作）

私たちの大阪昇平開拓団は、ハルビン郊外の安達から約37kmにある昇平鎮というところに入植しました。私は、そこで国民学校5年生、11歳の時敗戦を迎えました。この時から私たちの苦難が始まりました。

まず、満州人が襲ってくるというので、各部落に住んでいた団員家族が昇平鎮内の学校に集結しました。幸い襲撃はありませんでした。

開拓地を放棄して鉄道のある安達へ行けばと、荷物は大車に積み、雨季のドロ道、時には胸まで水に漬かりながら歩きました。匪賊を避けながら安達に着いた時は、ドロドロのまま、泥のように眠ってしまいました。この逃避行で7人がなくなりました。

安達に着いた735人が泊ったのは、馭者の泊まる馬舎という粗末な簡易宿でした。治安が悪く、酔っぱらったソ連兵が、自動小銃で所かまわず天井に向けてダダダダと撃って、何の抵抗もできないのをいいことに、金品特に時計を強奪し、女性を連れて行くのです。それからは毎晩恐怖の連続でした。18歳の姉は、頭は丸坊主、顔に炭、胸はさらして巻き、男になり難を逃れました。ソ連兵が母を連れていこうとした時、私がしがみつき大声で泣きましたら、ソ連兵があきらめるということもありました。

9月に入ると気温が一気に下がり、真冬はマイナス20℃～マイナス30℃が常温です。暖をとる燃料はなく、食べ物も乏しく、虱による発疹チフスで患者は40℃の高熱をだし譫言を發して死んでいきます。12月にハルビンに出発するまでに166人がなくなりました。

ハルビンではマジヤコウにある花園国民学校という立派な建物に收容されましたが、校舎の中は荒らされ、何もないコンクリートの床に畳を敷き、親子5人抱き合って寝

ました。お金もなく飢えと寒さで幼い子どもがどんどん死んでいきました。ハルビンでの死者 188 名です。ここで一番嬉しかったのはソ連兵が強奪に来なかった事です。

春先に結核性脊椎カリエスに罹りました。死んでなるものかと自分にも言い聞かせ、家族全員の懸命な看護で一命を取り留めました。“日本に帰れる”という報せを受けた時は、歩けないぐらい弱っていたのに、うそのように立ちあがっていました。

ハルビンを汽車で出発して間もなく、松花江^{スンガリー}の鉄橋が爆破されていたため、対岸へモーターボートで渡りましたが、その間、今まで撃ち合っていた国民政府軍と八路軍（共産軍）が撃ちあいを中止し、私たちが汽車に乗り汽笛が鳴ると、また銃声が聞こえたのも、何かのんびりした戦争をしてるんやなーと子どもでも不思議に思ったことでした。

長春で2泊、さらに汽車で南下し、胡蘆島^{コロトウ}という港で10日も待ち、やっと乗ったアメリカの貨物船リバティーでは船底から何段もあるカイコ棚のような長い木のベッドに押し込まれました。ある朝早く、甲板は一杯の人で、「日本が見えたぞー」の声に大歓声が上がりました。博多湾の松の緑が美しく、あぁー死ななくてよかったとつくづく思いました。

10月10日博多に上陸、待ち受けていたのがDDT、頭から真っ白な粉を浴びて、眉も睫毛も真っ白けで、お互いを見て大笑いしたものでした。

翌日、母の姉妹が住んでいた広島へ向かいました。広島では、駅のホームから遮るものがない焼野原の向こうに宇品港が見えたこと、橋の欄干が吹き飛んでなかったこと、従兄自慢の福屋百貨店が丸焦げで傾いていたことなど、固唾^{かたす}をのむ光景は今も目に焼きついています。

母の姉は首からお尻まで大火傷、いとこの一人は行方不明、火傷も怪我もなかったいとこも15年後歯茎から血が出て止まらず、髪の毛がバサバサと抜け落ちました。

敗戦後は苦難の連続でした。この体験から、戦争はいやだ！と心から思いました。



4 対談

聞き手

「質問をさせて頂きたいんですけども、戦争体験がない私からの質問で失礼があったら申し訳ないですが、三つほどお聞きしたいと思います。最も怖かったソ連兵のことは、今の朗読の中にもあったんですけど、どのようなことがございましたでしょうか。」

西澤

「はい、まあ戦争というのはそういうものだという風に思うんですけども、ソ連兵も日本兵も悪いことをしたと聞いておりますけれども。実際は本当にもう何の抵抗もできない、男たちも丸腰です。下手に抵抗をしたら撃ち殺されますし、一番の武器は子どもたちだったんです。で、私の姉が18歳でしたから、その姉が丸坊主になって、顔に墨を塗って、そしてさらしで身体を巻いて男になった時、一日泣いてたのを覚えています。そういったことで、ソ連兵がやってきますと、一番の武器は子どもが泣くことなんです。私たちは、とにかく「コマンダー、コマンダー」と言って泣けと言われて、私たちは泣けますけど、小さい子はお尻を捻^{ひね}られて本当に痛くて泣くという、まあ笑える事実なんですけど。私は5年生ですから「コマンダー」は、「困るんだー」を早口で言ったらそうなるのかなと思って、「コマンダー、コマンダー」と言ってたんですけど、実際はコマンダーは司令官で、司令官を呼ぶぞーという意味で叫んでたんですけど。泣き声が一番ソ連兵は嫌がります。もう泣くのが武器というのが、この時実感しています。ただもう、あの時の恐怖は、いまだに熱が出て、風邪ひいて熱が出て寝ていたら、やっぱりソ連兵が出てくるんです。もう、70年経ってもまだトラウマになってるんですね。まあそういうことで辛い思いをして…」

聞き手

「10代のうちに辛い思いをしたことが、いまだに思い出される、うなされるということがあるんですね。それでは続いてなんですが、松花江（スンガリー）でのエピソードは何かございますか。」

西澤

「松花江^{しょうかこう}という、スンガリーとロシア語でいうんですが、その川幅は大体80から100メートルある大きな河なんです。その河をですね、先ほど読んでいただいたようにマイナス20度、30度が常温ですから、その河が全部凍ってしまうんです。ちょうど安達^{アング}からハルビンに行くとき、まだ鉄道が、まだ鉄橋が爆破されてなかったですから、それに乗ってハルビンに着くまでに、松花江を越えると、トラックどころか戦車まで走ってたんです。この河の上をですね、もう相当分厚い氷が張ってるんだなと実感しました。そしてその氷が溶ける時がまたすごいんです。もう本当に、沿岸に居たら吸い込まれるので

はないかと思うほど、氷の割れたのがピ、ピ、ピーッと走って、そして今度は大きな塊が動き出すわけです。まあそういった寒さというのは、本当に命取りになるんですけども。あの、ご経験なさったかどうかわかりませんが、素手でこうノブを掴むとピタッとくっついてしまうんです。そして慌てて手を放すと、皮がめくれて、血が流れてしまいますから。しばらくじっとして、そして放さないともう皮がめくれてしまうというのが普通の状態で。私たちは大きな手袋をして、ドアの開け閉めをするんですけど、何かの拍子にヒヤッとやってしまうと、もう皮がめくれるというそういう寒さでございます。もう本当に、寒さのために飢えと栄養失調もあるんですけども、寒さのために多くの子どもたちから死んでいきました。」

聞き手

「色んなものを取り上げられて、先ほどおっしゃっていた手袋のようなものもないとか、暖かい服装もないという状態だったと思いますけど、そうですか、分かりました。ではですね、ちょっと今度は日本に帰ってきてからのことになりますが、広島での原爆被害のことを語っていただけますでしょうか。」

西澤

「先程、葫蘆島（コロトウ）から博多に上陸したんですけども、もう本当に日本で素晴らしいなと思ったのは、松の緑がですね、ものすごく印象に残りました。朝鮮半島もあまり木が生えていませんでしたし、満州も大きな木が生えていなかったんですけど、日本は小さな島にまで松の木がですね、もう本当にいきいきとして、「あ、日本に帰ってきてよかったなあ」と思ったんですけども。このエピソードの中でちょっと冊子をご覧いただいたら分かるんですけど、博多に上陸するのに21日間とどめられたんです。というのも、コレラ菌の患者が出たために、その患者は上陸しましたが、私たちは引き留められました。その間ですね、こんなにたくさんの演劇やら落語やら、もういろんな歌を歌う人いっぱいいるのをですね。毎晩演劇会がありましてね、もう本当にびっくりして、その時にたくさんの歌を覚えました。まあ、それから博多に上陸してDDTで真っ白になって、もう見事にシラミがですね、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、ポロポロ、ポロポロ地面に落ちて、本当にホッとしたことを覚えています。それから、客車に乗ってですね、広島へ向かうんですが、それまでは満州では無蓋車もいいところで、材木を積むような列車に乗せられて、ときどき居眠りをした人が転げ落ちて、そのまま放っておかれたりというようなこともあったわけなんですけど。客車に乗って広島へ行きました。そして、広島に着いてびっくりしたのは、もう本当に駅から宇品港が丸々見えたのと、先程お話にありましたように爆風で広島のひとつの橋の欄干がみな吹っ飛んでいました。でも、市電は走ってしまっていて、楽々園に母の妹がいたので、そこにとにかく、広島駅から己斐（コイ：現西広島駅）まで乗って、己斐から楽々園に行きました。そし

て無事、みんながいたんですが、私の三つ上の仲良くしてたノリヒトというのが、中学2年生で、残念ながら爆心地の所で、全く影も形もなく消えてしまっています。まあそういったことを目撃し、話を聞き、そしてまたここに伯母の手記がございますので見て頂いたらと思うんですが。その伯母も爆心地に背中を向けていたので、顔は火傷しなかったんですけど、首からお尻を大やけどして、3年ほどケロイドで、ケロイドというのは身体の中をぐるぐる動くんですね。固まるまで動いてます。で、その伯母が、いみじくも言ったのは、私、慎（ツトム）というんですが、「つーちゃんはしんどかったら大の字になって寝転がってええね。私はもう一生大の字になれないよ。」背中が亀の甲羅のように固まっていました。それも1回だけしか見せてくれませんでしたけれども。そういうのを見聞きする中ですね、私が教員になってから後、ずっと平和運動を続けています。今も宝塚では6と9の日は、69（ロッキューウ）運動と言って被爆者の想いを伝えながら、核兵器廃絶のために続けています。以上です。」

聞き手

「はい、ありがとうございます。お話しの中にもあった、6と9の日なんですが、毎月6日は売布神社の駅前、そして9日は逆瀬川の駅前で、西澤さんご自身が平和を願う演説をされていらっしゃるということですね。はい、では皆さんお近くだと思いますので、毎月6日と9日、6日は売布神社の駅前、9日は逆瀬川の駅前になりますので、時間帯は。」

西澤

「土、日は11時～12時なんですけども、ウィークデーは5時半～6時半なんです。夜やってます。」

聞き手

「是非、お子様もお連れ頂いてその話にちょっとでも耳を傾けていただきたいなと、そんな風に思いました。西澤さん今日はありがとうございました。会場の皆様に何か一言思いがあれば、おっしゃっていただければと思います。」

西澤

「先ほど申し上げましたけども、この難民生活をした時の不安というのは、今も世界中何百万という方々が難民になっておられますので、難民のための色んな寄付だとか、色んなのをやってますけども、少しでも心があれば、難民救済のためにも、皆さんよろしくお願いいたします。難民、元難民、70年前の難民からお願いいたします。」（拍手）

第3部 講演会

1 講師

田辺 真人さん

2 講演テーマ

「戦時の責任と人道」～島田叡（あきら）の生き方～

3 講師プロフィール

田辺 真人



神戸市出身。園田学園女子大学名誉教授。兵庫県史編纂委員。宝塚市大使。関西学院大学文学部史学科卒業。1986年から1991年にかけてニュージーランド教育省、国立マッセイ大学に勤務。園田学園女子大学教授（歴史学・比較文化論）を経て現在は同大学名誉教授。宝塚市教育委員長や宝塚市文化財団理事長などを歴任。地域史研究などに対して兵庫県文化賞、神戸市文化賞、宝塚市市民文化賞、ロドニー賞などを受賞。ラジオ関西「田辺真人のまっこと！ラジオ」、NHKテレビ「新兵庫史を歩く」などに出演。

4 講演の記録 「戦時の責任と人道」～島田叡（あきら）の生き方～

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました田辺でございます。私は歴史の研究者です。特に平和運動の体験があるわけでも、戦後生まれですから、実際の戦争実体験もございませんので、どんなお話ができるか自信がありませんが、それでも昨今の世界や日本の状況を見てみると、なかなかきな臭い方向に社会が向かっていることは感じるわけです。そんな中で、これからの日本を支えていく日本の若い人たちの多くが、あまり深刻に物事を考えてないように思えて心配です。いろんな国の人たちを見ていて、かなり賢い人がおると思うドイツでさえ、二度の失敗をしなければ分からなかったということを考えますと、我々の日本はもう一回失敗しないと分からないのかと不安になります。

8月になりますと、毎年敗戦の日の前後に戦争や平和のことを考えるという機会が非常に多いわけですが、宝塚の場合は、昭和20年7月24日という、敗戦間近に空襲を受けているわけです。宝塚市は戦後の昭和29年に市制が実施されましたから、まだ宝塚市は太平洋戦争中は、まあまだ田舎でした。武庫川の西側は、武庫郡良元村、川の東側は川辺郡の小浜村という地域でございました。意外に思われる方も多いかもかもしれませんが、昭和の初め

に、考古学者の武藤誠先生が引っ越して、転居のはがきを友達に出したら、受け取った友人から「外地に引っ越されたんですね」という返事が来たと書いておられます。仁川（ニガワ）へ引っ越したと通知されたんですが、多くの人には、仁川（ニガワ）が知られておらず、仁川（今の韓国のインチョン。当時ジンセンと言っていた）や思われたというのです。それくらいに昭和の初め、戦争前後はこの辺りはそんなに住宅化はしていませんでした。戦時中は、7月に飛行機会社、川西航空機の作業所が競馬場の所がありましたから、ここに米軍が空襲を仕掛けたのです。良元村の記録では、28名の方が亡くなり、その周辺で450戸の家が空襲で被害を受けて全半壊したという程度ですから、そんなに密集した都市ではなかったことが分かります。

昭和20年になりますと、3月頃から、米軍は本格的に日本の各地を空襲し始める。10日に東京、12日に名古屋、そして13日に大阪が空襲を受け、兵庫県下では3月17日に神戸大空襲というのがございました。当時の神戸市というのは、今の兵庫区に人口が集中してましたから、米軍は兵庫のその周辺を襲撃するんですけども、まだこの段階では、東灘区は神戸市に入っておりません。灘から須磨、垂水までが神戸市で、米軍は周辺から攻撃して、逃げ場を失わせて真真中で焼き殺すという形で空襲を行ったわけです。3月17日の空襲では、夜明け前の2時から大体5時までの間にB29、306機が空襲を仕掛け、2,600人ほどの人が亡くなり、23万人の人が被災をして焼け出されております。神戸の大空襲はこの後6月5日にまた行われるわけですが、6月の大空襲では7時半から10時半、この時間帯お分かりになりますでしょうか。3月の空襲のときは、アメリカの空軍も日本の反撃を恐れて夜中に来るんですよ。暗い中を照明弾落として爆撃する。ところがもう6月になると、日本側の反撃なんかおそれるに足らず。明るくなってから来るわけです。7時半から10時半まで。この時の空襲では3,400名が亡くなり、21万人が被災しました。この6月の大空襲が『火垂るの墓』に描かれているのです。神戸市は昭和14年に人口100万を超えるんです。昭和14年には垂水も神戸に入っておりませんから、今の灘から須磨までの間で人口100万。わずかな増減があつて昭和19年の秋の人口調査で98万人だったんです。これが昭和20年の秋、敗戦1箇月ほど後の調査で神戸市の人口は38万人になっているんです。つまり、神戸市民の3分の2の人たちは殺されたり家を焼かれ、住む場所を失って、よその土地行ってしまったということなんですね。昭和20年、半年で神戸では6千人あまりの人が殺されていったわけですけども、阪神淡路大震災の死者がおおよそ6千人。神戸の町中で半年間でそのくらい亡くなっていったのです。ところがこれと比較にならない被害が、先ほどの西澤さんのお話しの広島で、8月6日の原爆で広島では26万人が殺されたわけですし、8月9日の原爆で長崎では15万人が殺されました。1発の原子爆弾で26万人。神戸の半年間の被害の40倍以上の犠牲者ですね。長崎で25倍。これと並んで、沖縄では4月から6月の沖縄戦で12万人の人が殺されたということでもあります。しかも当時の沖縄は、昭和20年の人口調査で、沖縄の人口全部で50万人なんです。神戸の半分だったわけですけども。殺された人の数は神戸の20倍だった。こう考えると、阪神淡路大震災も大きな自

然災害ですが、戦争という人災がいかに大きな被害をもたらしたかということがお分かりいただけると幸いです。

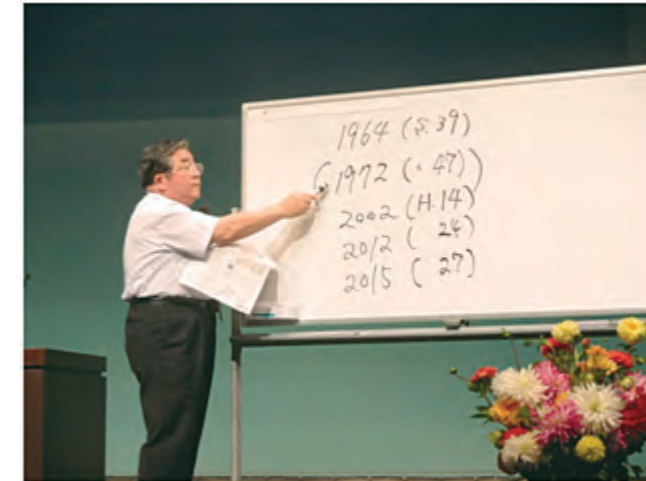


今日お話しします、島田叡さんの行動は、この沖縄戦に関わるテーマであります。そして阪神間の戦災を主題にした、阪神間を舞台にした『火垂るの墓』、今日はこの二つのテーマから戦争や平和、人間を考えられればと思います。今日は、1時間という短い時間ですが、野坂昭如さんが『火垂るの墓』で描いた6月5日の第2回目の神戸大空襲や、戦前最後の沖縄県知事・島田叡（あきら）さんの行動を通じて、戦争や平和や人間の死というものを少しでも考えていただけたらと思います。

福永武彦という作家が、人は皆2回死ぬと書いています。それがどういうことかと言いますと、我々自身が病気や怪我、あるいは寿命が尽きて死んでいく。本人が死ぬわけですが、本人が死んだ後も、その人を知っている人の思い出や記憶の中で、生きていた時以上にいきいきと人の印象が生き残る場合もあるわけですよ。ところが、その亡くなった人を知っていた人が一人死に、二人死にして、最終的に覚えてる最後の人が死ぬ時に記憶、イメージとしてのその人の存在も消滅する。これが二回目の死だというわけです。日本のしきたりは非常にうまくできておまして、昔から家族の誰かが亡くなると、その亡くなった月の亡くなった日におじいちゃん、おばあちゃんが家に帰ってくる、祥月命日といって供養して遺された家族と交流します。もう死んでしまっているんですが、あるおじいちゃんおばあちゃんの思い出がある、つまり死者の魂に個性があるわけです。これが、ある期間を過ぎ去っていきますと、そのおじいちゃんおばあちゃんを覚えていた人も死に絶えてしまう。さあ、その時にどうするか。おそらく私たちの先祖は三十三回忌とか、五十回忌というもので、覚えていた人もなくなる時期ですから、言い換えますと、その時に死んだ人の思い出も消滅し、個々の死霊が個性を失うと言いますか。そこで個々の死霊は、先祖全体の魂に合体していく。これをご先祖様と呼び、命日ではなく、お盆にこっちに帰ってくると考えて供養しました。亡くなった人については、時が経つにしたがって記憶がうすれ、忘れられていくのが普通だと思います。ところが、時間が経つにしたがって思い出が

新たになり、評価が高まっていく場合もあって、そのような一人が、今日お話しする島田叡さんではないかという気がいたします。

私が島田さんの名前を知ったのは1964年（昭和39年）。私は、1963年（昭和38年）に高等学校に入学しました。昭和41年に考えたら、昭和20年の敗戦から20年ほど経ったところに高校生でした。当時、我々の周りには、戦争を体験した人が沢山いて、焼け跡が街の中に残っている。今、阪神淡路大震災から21年ということはですね、敗戦から私が高校生になったころの我々の戦争に対する記憶、フィーリングは、今の高校生が阪神淡路大震災に描くようなものだったんだろうと思います。この昭和39年に私が通っていたのが県立兵庫高校で、たまたま島田叡さんの母校、旧制の県立神戸第二中学校の後身でした。そのころの関係者が、昭和20年に亡くなった島田さんを20年目に顕彰しようということになって、それで二中の同窓生やら知人が集まってぶ厚い本を出したんです。昭和40年ころの知事・金井元彦さんは二中・東大・内務省と島田さんの後輩で、島田さんを尊敬しておられたことも支えになったと思います。『沖縄の島守 島田叡』。今と違ってほとんどの人が、島田さんの名前知らなかった時代でした。全校生にその本が配られて、初めて私も高校の先輩にそんな方がおられたんだと、この本からお名前を知ったのです。その後、1972年（昭和47年）に沖縄が本土復帰することになるわけですが、そのころから島田さんの名前が、兵庫県下でもだんだん知られるようになってきました。



ところで、沖縄県が本土復帰した時にですね、兵庫・沖縄友愛運動というのが始まったんです。この運動は、兵庫と沖縄が交流し、戦中戦後大きな犠牲を払う沖縄の人を兵庫県民もできるだけ支えようという運動でした。戦後も、沖縄は米軍の施政下に置かれてたわけで、例えば高校野球で本土に来るにも、沖縄の高校生にはパスポートがいりましてし、まだ沖縄ではドルが使われていました。

それでも高校野球連盟がなんとかして沖縄の高校生も全国高校野球大会に参加できるようにと、記憶されている方あると思いますが、首里高校が初めて甲子園に出てくる。彼らはパスポート使ってやって参りました。応援団なんか来られないわけです。そこで、兵庫県の高等学校が首里高校の応援をする、というようなことが復帰以前からあったんです。その原因は沖縄の最後の官選知事、沖縄県民から非常に慕われていた島田叡さんが兵庫県出身だったということで、兵庫との交流があったからなのです。まだ、沖縄がアメリカの施政下に置かれていた時に、沖縄はまだまだ復興ができていない、体育館がない、兵庫県で募

金を集めて那覇に体育館を作ったこともありました。

2002年（平成14年）は、沖縄が本土に復帰して30年、この時に初めて兵庫県で島田叡さんに関する大きなイベントが行われました。この2002年というのは、阪神淡路大震災から7年経っている。それまで島田さんのことを伝えたり、顕彰したりするのは主に沖縄の人たちや県立兵庫高校（旧、神戸二中）の同窓会の人たちだったんですけど、この2002年の沖縄本土復帰30年の時に、これは兵庫・沖縄友愛運動も30年目なんですけど、この時に、「島田さんをもっと広く顕彰しよう」と言われたのが、貝原前知事だったんです。貝原知事は1995年の阪神淡路大震災当時、兵庫県知事ですが、このときに、この非常緊急事態に県のトップはどうするべきかを考えると、太平洋戦争中の沖縄県知事だった島田さんに行きついたという風に言われるんですよ。島田さんは内務省のお役人でした。そうすると、今の総務省系の、貝原さんも今の井戸知事も同じような官庁の後輩ですから、その時から島田さんのことをもうちょっと、世に知らせていこうということになりました。2002年の時には県民会館の県民ホールで、島田叡さんを顕彰する会というのが行われました。兵庫・沖縄友愛提携30周年の記念も兼ねて、島田叡さんを語り継ぐという催しが県民会館で行われたんです。この時、私はたまたま後輩だし、歴史家だからということで、記念誌の編集やパネルディスカッションのコーディネーターを頼まれました。高等学校の2年生の時に会った大先輩に、40年ほど経って、再会するという事になったのです。この催しには結構大きな反響があったもんですから、10年後の2012年に、これは沖縄が復帰して40年、つまりは兵庫・沖縄友好提携の40年目、これをまたやろうということになって、三宮の朝日会館のホールで「沖縄の島守を思う夕べ」という催しが行われました。この時も大きな反響があった。すでに2003年に元読売新聞社会部長だった田村洋三さんが『沖縄の島守（中央公論新社）』を著わされ、やがてNHKや民放でも島田叡さんの生涯が放送されるようになりました。そしていよいよ、去年2015年は、この復帰の周年とは違いますが、昭和20年つまり1945年の終戦から丸々70年ということで、大きな野球場が那覇にでき、その前に島田さんの記念碑が建てられ、今度は沖縄でも顕彰の集いをやろうということになって、2015年6月28日に戦後70年のフォーラムが、沖縄の島守が原点となった兵庫・沖縄友愛を記念して、沖縄県立博物館で行われました。この時も基調講演とコーディネーターを務めさせていただいたのです。本当に想定外に島田さんに関わる機会を与えられてまいりました。

島田叡知事の略歴というのを今日のプリント左側に載せました。明治34年（1901年）12月25日に須磨、この当時は須磨はまだ神戸に入っていない、兵庫県武庫郡須磨村西須磨に、今でいう離宮道の近くの開業医の長男として生まれられました。その後、西須磨小学校に入り、これは今も離宮道の東側にあります。大正3年に西須磨小学校を卒業して、兵庫県立第二神戸中学校に入る。そして大正8年に卒業した後、第三高等学校から東大の法科に行かれて、そしてそのあとは内務省に入って各地を異動しながらお勤めされる。一方で彼は、すごいスポーツマンで中学、高校、大学でも野球部の名選手として、特に東大

の時は非常に有名だったようです。同時にラグビー部にも属してスポーツをやっておられました。当時の内務省ですから、知事はじめ役所の主だった管理職は、内務省からの異動で、命令でやってくるものですね。この島田さんも山梨、福島、岡山、三重というような所。特に警察ばたをずっと歩いてこられたということなんです。そして昭和19年の8月から大阪府の内政部長、大阪の府庁の総務部長のような地位に就いておられ、翌20年早々に、沖縄の知事にどうかと内示を受けることになるわけですね。戦前は知事も政府が任命するわけで、官選知事といわれます。この前に26代目の泉という知事がいました。1944年（昭和19年）の3月にもうすでに政府や軍部は、連合軍が日本に攻撃を仕掛けてくるとしたら、太平洋の南の方からやってくる。ということは、沖縄がまず攻撃されるだろうというので、沖縄に第32軍守備隊を創設して、那覇、首里に置くわけです。それから陸軍だけでなく、海軍の陸戦隊も那覇の所に設置すると。この中で、レジュメの年表を見ていただいたら、昭和19年の10月10日に初めて那覇が空襲されるわけです。本格的な沖縄の空襲は翌年1945年の春になってからということですけど。この泉知事と陸軍、海軍の軍人とあまり相性がよくなく、ここが戦場になると、住民が巻き込まれるので、住民を避難させなきゃいけないわけなんですけど、知事はあまり熱心に疎開の事業を進めていかない。しかも、空襲があると怖いもんですから、県庁へ出勤せずに防空壕に逃げ込んでしまうという有様で。とうとう昭和19年の12月に沖縄から出張と称して、本土へ戻ったまま、沖縄には帰りませんでした。どういう手を使ったのか、出張で来たまま、香川県知事になってしまうんです。昭和19年の12月。そこで、沖縄県知事がいないということになってしまったものですから、政府としても誰かをということで、翌1月になると、何人か内務省の官僚に打診をするのですが、みんな断るんです。もう数箇月で、米軍の攻撃が始まることを日本の指導者たちは知っていましたから。



そんな中で、大阪府の内政部長をやっていた島田さんは、沖縄県知事に行くかどうか打診されて、引き受けてしまうわけですよ。友達も家族もそんな危ない状況を心配して賛成しなかったようなんですけど、その時に島田さんが「おれは死にたくないから、誰か代わ

りに行ってくれとは言われん。」と言って。島田さんの座右の銘というのが「断じて敢行すれば（強い決心で、敢えてことを行えば）、鬼神も之を避く」という言葉で、若いころから言っておられたそうです。

とうとう、1月の10日頃に打診された沖縄県知事を引き受けると。そして、大阪の内政部長でしたから、出発前に天王寺に書を揮毫された。それがこのレジュメのプリントにある「断」です。昭和20年の1月7日、これを天王寺に残して、そして軍刀と青酸カリを持って1月31日に沖縄に着任されました。まずは、軍と交渉しないといけない、一体どういう計画を考えているのか、もう一つは住民の避難を進めていかなきゃいけない。沖縄の本島は南北に長いので、ヤンバルクイナがいる北の方はまさか、最初に米軍も入ってこないだろう。だから中心部に居る首里、那覇の人たちを北方、南方に退避をさせるということ。それから県庁に食料を貯めていても、攻撃されたら全部なくなってしまうから、各地に分散、保存していく。それでも、米が足りないのです。そこで、2月になりますと、周辺で米があるところ、当時日本の植民地であった台湾がありましたから、飛行機で台湾へ飛んで、台湾総督府と掛け合って、「沖縄で米が足らん、何とか船で送ってくれ。」という交渉を成立させ、3千石の台湾米を沖縄に船で運ばせた。ただこれについては、つい20年ほど前までは、途中でアメリカ軍の攻撃を受けて船が着かなかったと言われてたんですけど、この島田さんに非常に関心を持たれて、綿密な調査をされた田村洋三さんの調査の結果、3千石の米を積んだ台湾の船は那覇港に入ってたということが20年ちかく前に分かりました。

いよいよ3月になりますと、沖縄各地が空襲され始める。那覇もダメ、首里もやられてしまう。この時、陸軍の司令官だったのが、牛島満陸軍中将、第32軍司令官。海軍は、大田實という海軍司令官、海軍少将がいました。首里や那覇のあたりでの攻防戦の結果、米軍に押されると牛島中将は、軍を連れて沖縄本島の南に徐々に退避をしていくという計画を立て、この時、島田さんは反対で、島の南と北には住民が避難している。それを軍部がそこへ行ってしまったら、戦場になって、住民に被害が出る。むしろ、基地や弾薬や武器のある首里で最後まで、軍は戦うべきだというんですけど、牛島中将は沖縄の軍隊の一番の目的は、米軍、連合軍の本土への上陸を遅らせる、犠牲が出てもここで時間を稼がなきゃいけないと考え、結局、陸軍は南へ避難することを始めたわけです。それで、住民と一緒に巻き込んでいくことになるのです。こうして5月に首里軍の南部への転戦が決定された。アメリカがこれを追撃してくる。6月になりますと、日本側は、もうじり貧の状態、そして那覇の県庁も破壊されている。県庁の場所も仕事しようにも、米軍が攻め込んでくる。そこで、県庁職員の人、数百人は、徐々に沖縄の南へ南へ。沖縄本島の南の方は、高台になっていて、ご承知のように石灰岩地帯で、そこへ雨水がしみ込んで、石灰岩を溶かし流して、ほら穴をあける。石灰岩がぼたぼた落ちるときに、鍾乳洞ができるわけで、ガマと呼ばれる鍾乳洞がたくさんあります。とうとう最後の沖縄県庁は、その洞窟の中に置かれました。私、去年行って来たんですけども、その洞窟の中でかなり大きな轟（トドロ

キ）という壕がある。ここは地表から大分垂直に降りていくんですけど、降りて行ったそこに川が地下に流れているんですね。水平の空洞ができていますね。雨が降ったりしたら、大きな水の音が轟くものですから、轟の壕と、土地の人たちは、今も呼んでおります。この壕に逃れていた県庁職員は、とうとう6月の9日に県庁の機能は、破壊されて果たせないということで、この洞窟の中で、島田さんは県庁を解散。この時に、県庁の職員だった人たちに「今から県庁は解散するから、ともかくどうか命だけは大事にして、落ち延びていくように」と言ったようです。実際に言われたおばあさんのお話を聞きましたけど、そのおばあさん、この右下の私の文章の冒頭です、今年6月23日。今年というのは、この文章頼まれたのが、この時の記念誌です。2012年の行事のための本を作ろうということになって、この文章の一部を載せています。たまたま何か書かなきゃいけないなと思っていましたら、偶然、神戸新聞の夕刊に、6月23日読者欄で投稿があったんです。それが85歳で、元沖縄県職員で、山里和枝さんという人なんですけども。戦争中のことはもう思い出したくない。ただ島田さんのことだけは例外だと、今でも言ってるんです。多くの沖縄県庁の職員だった高齢者の人たちがよく言うのは、とにかく解散ということになった時、命を長らえるように、大事にするように。こっそりと何人かの人には島田さんが「米軍は女性が手を挙げて出て行ったら、おそらく攻撃をしないからね。米軍に投降してでも命長らえるように」と言ったという証言があります。ところが、言われた人たちは当時、すごい不満を覚えたと言っています。なぜ知事がこんなことを言うんだろうと思ったと伝えています。子どもの頃から、忠君・愛国で育てられ、敵の捕虜になるくらいだったら死ぬ道を選べと教え込まれてますから。知事から今更、命を大事にして生き延びよと言われても、なんてことを言う人だと思ったという方が何人かおりました。



ところが、そのあと何十年か経った後、その意味が本当に分かった。あの人は、すごい人だったという風な意見を言っている沖縄の人が多いんですね。今日も宝塚市からの依頼で島田さんの事を、何か話そうと思いつきながら、先月末2016年6月29日付の朝日新聞の夕刊を読んでいると、高校野球の各地の大会が、沖縄を皮切りに始まったと報じられていました。記者が沖縄に行って取材したら、沖縄の野球関係者がいまだに2人、恩義を感じている人がいると聞いたというんです。島田さんと佐伯達夫さんだそうです。高野連の会長をされて、アメリカの占領中に沖縄の高校が高校野球に出られるように努力された佐伯さんと並んで、島田さんの名前が書いてあったのです。皆さん方、8月になって平和や戦争やといった記事が新聞にい

ろいろ出てまいります。私、観ているとやっぱり2年に1回くらい沖縄の人の中に、島田さんのことを書いられる記事や投稿が今でもあります。亡くなってから70年経ってもいまだにこういう風に言われる。その背景は、さっきお話ししたみたいに、赴任直後から知事自ら沖縄県の人々の為に一生懸命働かれるのを見て、県庁の人たちも団結して戦争中頑張った、と言っている人が多いんです。この島田さんは、海軍の大田少将とは、わりに意見が合ったみたいですね。海軍側では、石灰岩の地域に米軍が近づいてくると、人工で洞窟を掘って壕を作りました。今でも那覇の近くに海軍の壕が残っていますが、この時に沖縄の人たちはものすごく苦労しながら協力したということを知っています。6月9日に沖縄県庁が解散した4日後の6月13日に、大田海軍少将は、壕の中で爆薬を破裂させて自殺、自害していきま。海軍が滅亡、倒壊してしまう。ところが、その6月13日に、大田少将が最後に海軍省に送った電報が伝わっているんですよ。その電報の冒頭を見ますと、発は沖縄根拠地司令官、あて先は海軍次官。今となっては黒く読めない所もありますが、この電報を海軍次官に「御通報方取計ヲ得度（おんつうほうかたとりはからいをえたし）」、海軍次官に届けてください。沖縄県民の実情に関しては、県知事より報告すべきもの。軍隊は直接県民のことに関わっておりませんから、県知事から報告すべきもの。なんだが、県にはすでに通信力なく、そこで頼まれたわけではないんだけど、この実情見るに忍びなく、海軍本部に送るとい。電報なんです。下から2行目のところ、有名な言葉ですが、「沖縄県民斯克戦ヘリ（かくたたかえり）」、そして、「後世特別ノゴ高配ヲ賜ランコトヲ」と言って、最後の電報を送って、そして大田少将は6月13日に自害しました。

このことから考えて今の沖縄の実情を見るにつけ、全く高配されていない。いまだに踏み台にされていることを痛感します。本土の人間として考えないといけない問題だと思うんですよ。そのまま米軍は、陸軍を南の方へ追い詰めて、そして海軍が消滅した13日の10日後、6月23日に牛島中将が自害して、陸軍も崩壊していきま。この6月23日を、一説には前日の22日を、「沖縄戦終結の日」と言っているわけですが、4月からの2箇月間、沖縄でこれだけの戦いが行われました。

私はある意味で、21年前の震災体験とダブるところがあります。私は神戸のポートアイランドで被災をいたしました。こういうと反発も受けるんですけど、大阪の人が冷たかった。これはどういうことかということ、1月に震災があつて同じ年の9月頃、大阪駅の飲み屋さんで「神戸の人は大げさに言うて、まだ震災、震災、や言うてるで。」と言ってる梅田の人がいました。大阪の人が悪いと言っているわけではなくて、大阪の人の方がいわば東京の人より冷たかったのは、「我々も揺れた」という一部体験があつたからです。東京の人は、揺れてないんで、きわどいメディアの画像や音をもとに「すごいことが起こっている」と思ったんですけど。大阪は「うちも揺れたけど、そんな大したことないって」という面があつた。時の大阪府知事などは、「神戸は自分で炊き出しをすれば」と発言して批判され、次の選挙で落ちました。

これ私、震災体験と似てると思うのです。私は戦争体験してませんが、私の両親は体験

している。そうすると、母なんかは「我々神戸も大変やっつてん、空襲で」と言うのです。神戸の震災被害は決して小さくありませんが、広島や長崎や沖縄と比べたらけたが違ふんですよ。日本中みんな、我々も戦争体験した、大変な目に遭ったと言いますけども、本当にドイツみたいな陸上戦を体験していない。東京も大阪もすさまじい空襲を受けたというけれども、私はやっぱり広島や長崎や沖縄とはけた違いの体験だったと思うんですね。日本各地で空襲で大きな被害が起きても、広島や長崎や沖縄とは規模が違うわけなんです。こういうことを考えると、やはり戦争というのは本当にどういう現実か、日本では広島や長崎や沖縄から学ぶ必要があると思います。

島田さんに関しては、本土復帰後の30年、40年、敗戦後70年というそれぞれの時に顕彰のためのイベントが行われ、その都度反響が大きくなってきているわけです。例えば先ほどお話しした田村洋三さんの『沖縄の島守』という本、是非皆さん読んでいただきたい。今は中公文庫でも出されています。副題は「内務官僚かく戦えり」というのです。田村さんのこの本が出たのが2003年なんです。2012年の復帰40年に島田さんを語る会を朝日会館で行ったと言いましたが、このころメディアもこれをとりあげ、TBSテレビの報道局が「生きる」というドラマを放送しました。このドラマの取材班が中心となって、『10万人を超す命を救った沖縄県知事・島田勲』という本を2014年にポプラ社から発行されています。つまり、語る会を催す一方で、その都度、その詳しい調査が行われ、成果が番組になったり、本になったりしました。その結果20年前には、島田勲さんの話をしても、ほとんどの方が「誰ですのん?」、という感じだったのですが、最近は少しずつご存知の方が増えてきているという状況です。島田さんご自身は、最期が分かりません。6月の22日に陸軍が崩壊してしまつた後、みんな分かれてその辺のほら穴におつたんですけど、島田さんの仕事の中身からも、荒井退蔵さんという当時の沖縄県の警察部長さんと2人で壕から出て行つたまま行方不明ということになっているのです。この荒井さんも島田知事着任以前から沖縄に赴任して県民を支えられ、島田知事と共に働かれた栃木県出身の方でした。ある人たちは、陸軍崩壊後、機関銃隊の人が海岸近くのある洞窟に入つて行つたら、その奥に知事さんがいたとも伝えてい。数日後、この機関銃隊の人たちが壕の中に横たわっている島田さんと、近くにピストルを見つけた。横にいた人が、「自害されました」と言つたという噂もあるんです。その人たちもみんなその後、命がけで逃げてますから、いまだにそれがどの洞窟だったのか、今も分からないのですよ。

そこで沖縄の島田勲さんの事跡顕彰会の人たちと兵庫高校の同窓会で、今も冬になると、最期の土地、遺品を探す調査が続いています。ひょっとしたら、何か資料が見つかるかも知れないですね。死ぬ間際になって食べるものがない時も、やってきた兵隊さんに、持っていた黒砂糖をあげたとか。あるいは、県庁解散の時、ともかく命を長らえるようにというお話を何人もの人にしている。あるいは、そのほら穴の中において生活している時に、朝、洗面用に水を持って行くと、命からがらとってきてくれた水を使われへんと知事さんが言つて、非常にありがたがられたというような話。いまだにそれが伝わっています。人は普通

亡くなって、だんだん忘れられていくものなんです、亡くなってから後、だんだん知られていくようになる人たちもいた。ユダヤの人たちを救った杉原千畝さんもそうですが、戦争の中でさえ、そういう人たちもいたのです。しかし、多くの人たちは弱くて、戦争の被害を受けるばかりです。『火垂るの墓』の話は、そのような名も残らなかった人たちと戦争のテーマですね。



戦争というのは、非常に悲惨な現状、現実ですが、それを文学として昇華させた作品の一つが『火垂るの墓』だと思います。野坂さんはJRの六甲道の近く成徳小学校の近くに住んでたんです。戦争中、市立神戸第一中学校、今の葺合高校に入っているんですよ。そこで6月5日の空襲を受ける。その空襲を背景にしながら、作品では旧制の中学校の生徒、清太（せいた）という男の子が空襲警報のサイレンを聞いて逃げます。小説の中では、主人公は御影の石屋川の下流の地域に住んでいたことになってます。空襲警報だというので石屋川の河川敷に逃げて行くと、米軍が真昼間の明るい時に攻撃しかけてくるわけですよ。3時間ほどの爆撃があった後、静かになって出て行ってみたら、もう街は焼け野原で、コンクリートの建物は今もある市立御影小学校、国道2号の北にある御影公会堂、これがポツンと建っていて、なんかもう自分の方へ近寄ってきたみたいだ書いてあるんです。お父さんは戦争に行ったまま消息を絶って、お母さんと4歳の妹と一緒に住んでたのですが、みんなバラバラで逃げたのですが、いざという時に集まろうと家族で約束していた御影公会堂の上手、石屋川の東の土手に行ってみて妹と再会するんですけども、お母さんがおらへん。いろいろ調べてみたら、近所のおばちゃんが、お母さん大怪我して救護所になっている御影小学校に運ばれているということを知ることができたんです。そこで、お母さんに会いに行く。けど結局、大怪我してお母さんは亡くなってしまふ。旧制の中学生の男の子と4歳の妹が残されることになる。これは昭和20年の6月ですから、もう2箇月ほどしたら、戦争は終わるのですが、その後、親戚の家に寄宿するんですけど、なかなか居りづらくって、結局家から持ち出した焼け残った品物で、妹と2人で生活する。二人

が行った先が満池谷。さくら夙川駅の下を南北にのびる県道建石線を、少し甲山の方に行った所です。JRのさくら夙川駅から北へ、山手幹線を越えて、阪急電車くぐって、さくら夙川駅から15分ほど行った所です。この県道の東側に、西宮市の満池谷墓地。春になったら、桜の名所でもあります。この満池谷墓地の所の谷間に貯水池が作ってあって、「ニテコ池」というため池があるのです。池の横の丘陵の斜面に横穴を掘った防空壕があったんです。ここへ妹と二人で転がり込んで、生活をする。7月、8月が近づいてくると、食べ物がないもんですから、ものすごい体に吹出物が出たり、妹はもう力がなくなってしまって、家の蚊帳を持って行ってたから蚊帳ついで生活していた。元気な時は晩のうちに蛍を持ってきて、蚊帳の中へ放すとききれいなものですから、喜んで子ども二人は見てはいるんですけど、そのまま寝てしまって、あくる日朝起きてみたら、ほとんどの蛍が死んでいる。妹がその蛍を一生懸命集めて、ほら穴の所でなんかして、お兄ちゃんが「何してんねん？」聞いたら、「蛍のお墓つくってんねん」これが小説の題名になってるわけですよ。その蚊帳に蛍がポツ、ポツと飛んでくると、力がなくなった妹は、その蛍を目で追って。やがて栄養失調で妹が死んでしまい、亡骸をお兄ちゃんが茶毘に付して遺骨をドロップの空き缶に入れて持つ。8月15日に戦争が終わったあと、結局どうして行ったのか、主人公は国鉄の三ノ宮駅の構内までやって来るんですよ。そして力尽きて、今もあるあの丸い柱の根元にぺたんと座り込んでしまふ。9月になると平和が返ってきて、三ノ宮駅の構内を中学生や女学生が行き交う。それを、虚ろな目で見ながら、あの制服は松蔭や、親和やと言うているうちに、とうとう主人公は力尽きて倒れて死んでしまうのです。駅中にそんな死骸が2、30あったというんですが、9月の22日のことだと書いてあります。駅員さんが来て、死体を片付けようとして、主人公の遺体をどこかに運んで行こうとしたら、ドロップの缶が転がり落ちるんですね。駅員さんがこれをカラカラと振ると、なんか音がするんですけど、蓋が錆びてて開かない。しょうがないと思って、缶を草むらにポンと捨てたら、捨てた拍子に蓋が開いて、中から白い粉と白い塊が出てきて、これは2箇月前茶毘に付した妹の骨だったわけです。で、このドロップの缶を駅員さんが草むらにほったものですから、それに驚いて、草むらからポーと蛍が飛び立った。最後に9月23日に、主人公の遺体は布引の奥のお寺で焼いて、その遺骨は無縁仏として埋葬されたというのがこの小説の全容です。奥の寺のモデルは、徳光院というお寺ではないかと私は思います。

この主人公のような人たちもたくさんいたと思います。こういう戦争の時の文学は、非常に弱い立場の人、死んでしまふと名も忘れられるような人を主人公にしながら、戦争の悲惨さをよく表した作品だと思います。戦争や平和を考える時に今日の私の話が少しでもお役に立てれば幸いですし、是非今日お話しした本や場所に直接に接していただきたいと思っています。どうもありがとうございました。(拍手)

終戦記念日のつどい

と き 平成28年(2016年)8月15日(月) 午後5時45分開式

ところ 末広中央公園(平和の鐘前)

主 催 宝塚市 宝塚市平和事業検討委員会 宝塚市原爆被害者の会
宝塚市遺族会 宝塚ユネスコ協会 ハートフル合唱団

~~~~~ 次 第 ~~~~~

- 1 開会
- 2 黙とう
- 3 宝塚市長 あいさつ
- 4 宝塚市議会議長 あいさつ
- 5 平和の歌合唱  
合唱 終戦記念日のつどいで歌う市民合唱団  
(指揮:高曲伸和 ピアノ:池辺幸恵)  
青い空は (作詞 小森香子 作曲 大西 進)  
長崎の鐘 (作詞 サトウ ハチロー 作曲 古関裕二)  
故郷 (作詞 高野辰之 作曲 岡野貞一)
- 6 平和のメッセージ  
戦争のない世界になるために 末成小学校6年 山内麻奈加  
本当の「平和」 宝塚中学校1年 河谷杏実  
平和を願って 宝塚市遺族会会長 川西武信
- 7 「平和の鐘」打鐘
- 8 宝塚市原爆被害者の会会長 あいさつ
- 9 閉会



平和の鐘 (末広中央公園)

多くの市民の寄附をもとに平成26年8月15日設置

## 平和のメッセージ

『戦争のない世界になるために』



末成小学校 6年 山内 麻奈加

私は、戦争のない世界になってほしい。そのためには、自分が言われていやなことを言わないことが、戦争がない世界への一歩になると考えた。

なぜこう考えたかという戦争などの勉強をしていると行きたくないのに戦争へ行き、キズつけないのに人をキズつけた。ということがあったことを知ったからだ。そんな戦争に対して、悪口や暴言は、自分から暴力ではないけれど口で人のいやなことを言い、相手の心にキズをつけるから、戦争の一つだと考えた。それらの行動と戦争とが直接関係ないのではと思う人もいるかもしれない。でも、戦争と悪口や暴言の同じところがある。それは「キズつける」ということだ。戦争と悪口や暴言とでは、キズつけ方はちがうけれど、どちらも人にいやな思いをさせて、人をキズつける。例えば、あだ名でからかっているうちに言い合いになることがある。そうすると本人たちだけでなく、周りにいる人たちにもいやな思いが広がっていく。だから、私は、自分が言われていやなことを言うことは、小さな小さな戦争だと思う。

戦争のない世界。それは誰もが願うことだと思う。しかし、今の私達では、戦争をふせげないと思う。なぜなら戦争をやるかやらないかは、子どもの意見ではなく大人の意見で決まってしまうと思うからだ。それでも、私達でもできることがある。それは、自分が言われていやなことを言わないことだ。そして、そうすることが、戦争のない世界への小さな小さな一歩だと考える。

『本当の「平和」』



宝塚中学校 1年 河谷 杏実

あの日から 71 年…。今から 71 年前の今日、日本は、長い長い戦争から解放されました。

六年生の修学旅行、広島へ行くまでは戦争の事を学校で学習したり、本の上で知ったつもりでしたが、いざ広島に行くと「百聞は一見にしかず」、衝撃でした。きっと、アメリカ大統領のバラク・オバマさんも深い衝撃を受けたと思います。初めて資料館や慰霊碑を見て、戦争というものはどれだけ恐ろしいものなのか、思い知らされました。

私は、今まで戦争や原爆のことを勉強してきて、ひとつだけ確信を持ったことがあります。それは、「この戦争のことを後世に伝え続けていかなければならない」ということです。

しかし、まだ戦後から百年も経っていないのに、私たちは、数少ない体験者からの話を聞く以外、忘れかけているのが現実です。そのうえ、戦争が再び起こるかもしれないのです。私は、

「なんとかして戦争をくい止める方法はないものか。」

と、考えてみました。すると、このような戦争の悲惨な出来事は、みじかなところで伝えられていたのです。

例えば、NHKの連続テレビ小説です。今、「とと姉ちゃん」を放送していますが、この話は、戦争の時代を力強く生き抜いた女性の話です。男性は嫌でも戦争に行かなくてはならないし、女性はお国のために尽くします。国民は、何のために戦争に協力して、大切な命さえも失ってしまったのでしょうか。

戦争で得るものは何も無いと私は思います。ただ、苦しみや悲しみが残り、尊い命が奪われてしまうだけです。

今、世界には戦争が絶えず続いています。今、私が語っている時でさえどこかで命を落とす人がいるのです。だから戦争の体験を後世に伝え、一人ひとりが戦争について真剣に向き合っていくことで、少しでも本当の『平和』というものに近づいていけると思っています。

## 平和特別講演会

と き 平成28年(2016年)12月17日(土)午後2時開演

ところ 宝塚市文化施設 ソリオホール

### 第1部 ミニコンサート

#### 1 出演

風と雲 (百瀬秀男さん 小林直一さん)

#### 2 プロフィール

##### 百瀬秀男

1949年松本市生まれ。宝塚市在住。靴の輸入卸売の会社を経て41歳の時に靴の企画輸入卸売業の会社を立ち上げる。57歳の時、良きパートナーであった妻が他界し大きな喪失感を味わう。一年半ほどした頃、長いトンネルから抜け出すきっかけになるかもとふと目にとまった「ギター教室」に通い、多くの仲間と音楽を通して元気になることが出来、今度は少しでも人の助けになればと考えて老人ホーム慰問等の演奏活動をしている。

##### 小林直一

1952年八尾市生まれ。八尾市在住。中学生の時、高石ともや、ピートシガー、ボブディラン、岡林信康、加川良を知り、社会の矛盾と反戦に目覚め、自分にも出来るとギターを弾き歌いだす。社会に出てからはギターを弾いていなかったが、55歳の時「ギター教室」に通いだし、人と演奏する楽しさを体感する。同時に教室に入りギターを始めた百瀬氏と知り合い以降、一緒に老人ホーム慰問等の演奏活動をしている。



コンサートの様子

### 3 曲名

|                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| 喫茶店の片隅で             | (作詞：矢野亮 作曲：中野忠晴)       |
| 黄昏のビギン              | (作詞：永六輔 作曲：中村八大)       |
| 見上げてごらん夜の星を         | (作詞：永六輔 作曲：いずみたく)      |
| An American Trilogy | (作詞・作曲：Mickey Newbury) |
| 故郷                  | (作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一)      |

## 第2部 講演会

- 1 講師  
成瀬 國晴さん (イラストレーター)
- 2 講演テーマ  
学童集団疎開「時空の旅」

### 3 講師プロフィール

#### 成瀬國晴



1936年大阪市生まれ。宝塚市在住。イラストレーター。日本漫画家協会会員。宝塚大学造形芸術学部講師。甲子園歴史館顧問。大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）運営懇話会委員。1974年から「見立て写楽 東西名物男」「成瀬國晴 美人画展」「古典落語原画展」「迎春掛軸墨絵」「ドキュメンタリースケッチ SUMO」など数々の個展を国内、海外で開催し盛況を博す。

「時空の旅」は2014年から大阪、東京、東近江市などで開催している。大阪府知事表彰文化功労者部門、日本漫画家協会賞、文部科学大臣賞など多数受賞。著書として「イラスト教室」(保育社)、「ドキュメンタリースケッチ大相撲」(京都書院)、「なにわ難波のかやくめし」(東方出版)、「画集 天神祭」、「画集 夢は正夢 阪神タイガースの20年」(たる出版)、「画集 学童集団疎開 70年「時空の旅」」(たる出版)などがある。

#### 4 平和特別講演の記録 ～学童集団疎開「時空の旅」～

こんにちは。今日はお忙しい中、ありがとうございます。今、歌を聴いてましたらね、もうホーっとなってしまいます。「故郷」でしょ。

今から話をするのは、僕の第二の故郷です。さっきの「風と雲」も素晴らしいですね。いや、あんな人が素人でおられるんですね。宝塚市も人を探すのがうまい。といいながら、今日の話に移らせていただきます。



3年前にふっと思い立って旅に出たんです。絵筆を持ってね。それで旅先はといいますと、今の「故郷」の歌にもありましたような内容の所、街の子が味わった農村生活、そういうものですね。当時は国民学校と言いましたが、今でいうと小学校3年生。だから年齢でいうと8歳、9歳です。その子どもたちと一緒に農村に行って、都会の子どもが生活をしました。そういう思い出を自分でたどりながら、自分が9歳の子どもになって、そして、六十余年一生懸命戦って描いてきたこの技術と、9歳の子どもになった気持ちと一緒にして、3年前の秋から7箇月かかって、一気に77枚の絵を仕上げたんです。したがって今日、皆さんに後ほどご覧いただけますが、70年前の旅先での話をさせていただきますので、私の旅の話を聞いていただきたいと思います。



まず、この時代の背景ですね。学童集団疎開というものがどんな背景の中で起こったかということをご覧いただきたいと思います。昭和16年12月8日、ちょうど75年前ですね。太平洋戦争が起きました。「新高山登レ1208(ニイタカヤマノボレヒトフタマルハチ)」という暗号が攻撃開始という暗号だったんですよ。ハワイオアフ島の奥のヌウアナ・パリという風の強いところから、淵田中佐以下海軍の航空隊がダーっと入って行って真珠湾攻撃をしたんです。そしてその後、「トラ、トラ、トラ」という有名な暗号がありますね。「ワレ奇襲作戦ニ成功セリ(ワレキシユウサクセンニセイコウセリ)」と。この「トラ、トラ、トラ」で大丈夫やった、行ったという話なんです。私、後年になって真珠湾攻撃の秘話というのをハワイまで行って取材をしたことがあるんです。この今日の話とちょっと外れますので、またの機会にさせていただきますが、とにかくこの昭和16年12月8日という日は、今度、安倍首相が行きますね。この26日から真珠湾に行って慰霊のために行かれるということですが、そんな時代の背景があったんです。

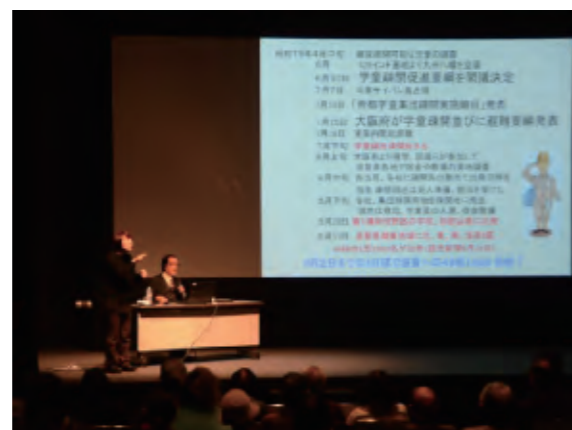
したがってもうこの年、すぐに学童集団疎開を始めないかんということになり、次の年の2月に始まったんですよ。そうこうしているうちに、初空襲がありました。そして昭和17年6月に日本海軍ミッドウェー海戦がありました。主力艦隊が行ってそれが木っ端みじんにやられたんです。これが日本にとっては大変な大痛手となって、ここからこの戦の転換が始まるわけです。負け戦です。そして12月になると、時の内閣総理大臣東條(英

機)さんに学童集団疎開をさせたらという話を周辺の人が進言する。もうすでに2月に進言してあるんですが、12月にもするわけですよ。東條さん反対なんです。時の首相ですから。そしてイタリア、日本、ドイツこの三国同盟の、イタリアはもうすでに18年に万歳、ギブアップですね。ダメだということです。その年のことですけども、この陸軍省の防衛課長の上田昌雄という人が、今度は東條さんに、また子どもたちを何とか安全な場所へ連れて行ってという話をするんですけど、ダメと。何でもかと言うと、戦をするには家ごと全部が一丸とならんといかん。それが子どもを抜くと、気が抜けてしまうと。核になるものがないからダメということで反対するんですよ、東條首相は。



ところが、この上田さんというのは、現実に前までポーランドにいて、そしてその駐在武官で、ヨーロッパの子どもたちの悲壮なものを見てきているわけです。現実イギリスもそうでした。それからフィンランドもそうでした。子どもたちが疎開をしているんです。そんな中で日本もということが話として出てくるわけです。もうすぐに19年の4月にまず縁故疎開の調査に入る。そして今度はB29のインド基地より、九州八幡を攻撃するという空襲があります。遠いですから、B29です。小さい飛行機は飛べないんです。距離が長いから。そして6月になって、学童疎開をやるということ、東條さんを納得させるのに、いろいろ手を回したそうです。結局は行くということになって。これが19年の6月ですから。そうこうしている内に、この年7月にサイパン島が落ちます。このサイパン島が落ちるといのは、これは日本にとって大きなことなんです。というのは、あそこに基地が来ると日本までは完全に射程距離に入るんです。近くなるから。そして艦載機、航空母艦の上に乗せた飛行機が飛んでくる、B29の射程距離に入るということでサイパン島はどうしても死守しないとイケないところだったんですが、結局は落ちました。そしてサイパン島が落ちたということになってくるから、いよいよこれは学童集団疎開をやらねばならないと、国が考えるわけですよ。これは子どもを農村に置くということは、安全な次の新しい時代のための保存じゃないんですよ。ひょっとして、本土決戦ですからもう沖縄の決戦の様に、この本土にアメリカ軍が乗り込んできて、戦いが本土の中で起こることのためには、次の戦力として子どもたちを温存しておかなければならない。でももう、男性は全部戦地に行っています。

街の中に残っているのは、女性と老人ということになるわけですから、次の戦いする子どもたちを置いとかないかと。そんなこともあったんですね。



さあ、7月になっていよいよ学童集団疎開の実施が発表されました。7月15日大阪府が学童集団疎開並びに避難要綱を発表しました。もうどんどん行きます。そうこうしているうちに東條内閣は倒れ、そしてもう、7月下旬には学童縁故疎開が始まっていくということなんです。7月の初めにも大阪市から先生方が現地に行って、どうして、どういう風な所に、子どもたちを寝かしたり、住ませたりするかという実地調査が始まった。それから向こうの受け入れも大変ですよ。突然のことだから。だって言っても、7月15日から始まってですよ、それから何箇月かの間に場所決めて、人数決めて、誰がそれをやるかということです。受け入れも大変だったですね。そういうことで、結局我々は荷物を発送するのは8月下旬です。行李と布団を。柳行李の中にザーッと物を入れて送って。それでも第一陣は8月28日出発でしょ。だから7月15日から8月28日という、まず1箇月ちょっとで、2箇月無いんですよ。その間バタバタとね、物事が決まって行って、それ行けということになる。

それで私たちは、8月31日に大阪の難波の私の母校である精華国民学校からスタートしていくのです。滋賀県へ行くのは大阪の南、東、北、浪速、この4区からは滋賀県へ行くことが決まっていた。したがって、天王寺区の人や吉野へ行ったり、奈良県へ行ったり、そういう形でみんな、学校ごとに行くんです。だから神戸の人たちは、どこへ行っただかという岡山とか鳥取とか、島根とかそういうところへ行ってるんです。大阪の此花区は香川県とか愛媛県とかに行ってます。とにかくバラバラに行ってます。我々滋賀に行くのは、49校で13,500人という数がスタートしていくんです。一般に疎開ということをよく言います。一番最初に行われたのは建物疎開だったんです。それは都市部において火災が起こった時、道の狭さをすぐに燃え移ることがあって、その中を抜こうという、道を広くし風が渡らないようにする建物疎開というものがあった。これは、難波の高島屋の前の方もありましたし、各地にあります。今でも大阪の鶴橋の向こうに行くと、疎開道路という名前が残っています。結局そこを家を間引いて広がっている。

そして、建物疎開の次に縁故疎開、お父さん、お母さん、お祖父さん、お祖母さんの親戚があるところへ行く、それも子ども一人で行かず、誰も付いて行かない、それが縁故疎開です。したがって、向こうの村へ行って、向こうの小学校に入ってという。それから、残留組という身体が非常に弱くて、というのがありますが、負担が不可能、要するに子ども一人で月10円のお金が当時要った。公務員の初任給100円の時代です。10円を毎月出す。国からの補助もあるが、子どもが3人いたら、当時は子だくさん、産めよ増やせよなので、戦争へ行く子を増やさなアカン時代。3人子どもいると、毎月30円出さないとけない。家庭としたら負担になる。だから残留という形に残るわけです。その他、お父さん、お母さんと一緒に親戚に疎開をする。こんな形がある。しかし、このどれにも該当しない子どもたちが集まって学校ぐるみで、集団疎開ということをやります。私がそうなんです。

大阪に故郷があるわけですから、どこに行くにも行けない、だから仕方がないから、集団疎開にやろうかというわけですね。これで、小学校3年生から6年生まで、全国でざっと100万人動いたといわれています。大阪が15万人、東京が35万人、といわれている。こういう風に、100万人の子どもが街からいなくなるという、13あるんです、街は。そしたら街はスカスカですよ。それがかえって良かったという結果を招くわけですが。結局、私たちは、このようにして、精華国民学校から集団疎開児414人の中の32人という数、3年生男子32人、3年生女子32人という形で、したことの無い農村生活をやることになるんです。文部省が調べた数ですが、縁故疎開が32万2千人、集団疎開が34万7千人、残留が32万人、ざっと合計すると100万人ですね。それだけの子どもが動いたということなんです。集団疎開に行ってくださいといわれた街は、東京、横浜、川崎、横須賀、名古屋、大阪、神戸、尼崎、門司、小倉、戸畑、若松、八幡。一応40万人の予定をしたらしい。昭和20年4月になって、京都、舞鶴、広島、呉という都市からも追加になっていくんです。



### “学校からの出発”

そんなことで、いよいよ学童集団疎開が始まって、私たちは、8月31日に大阪市立精華国民学校からスタートしていくわけです。父兄の見送りは学校まで、学校からあとは送らないようにしてくださいということで、小さい子どもたちが学校を発っていきます。

### “出発・難波駅前”

千日前にある学校ですから、難波の駅すぐ近くです。5分です、要するに高島屋の前からあの賑やかな通りを心斎橋のところ入ったとこの右側、入ってももの十軒も行かないとこ

ろです。そこにある学校ですから、今廃校になって立ち退きをしまして、広場になっていますが、ここから出て行ったんです。校門から列を組んで出ます。お母さんはここまで、お父さんもここまで、お祖母ちゃんもここまで。そして高島屋の前に市電が通っています。大阪駅前行きというのがあります。で、これにみんな乗って行くんです。ここは見送りなしです。

### “大阪駅”

今でいうJR、昔の国鉄の大阪駅から蒸気機関車が引く列車に乗って滋賀県まで行くわけです。みんな嬉しいんです、遠足でと思って、帰って来られないなんて思っていないから。いつ帰られるか分からないことなどないんで、とにかく行こうということで、列車の中でも賑やかではしゃいでいました。結局、出ていく時の賑やかさがあるんですが、家族の見送りはありません。



### “近江八幡駅”

そして、私たちが行った場所というのは、今、皆さんがおそらく、紅葉狩りで行かれる湖東三山という所、百濟寺、金剛輪寺、西明寺、この三つの名所がある傍ですけど、平松という所に、当時は愛知郡東押立村平松という、今は、東近江市平松町という風になっています。小さな村です。距離的にいうと今やったら、八日市から車で15分で行きますが、当時は大変だった。稲枝まで行ってそこから、バスという感じで。

### “稲枝駅”

能登川の手前に、稲枝という駅があるんです。ここでみんな降りて、下駄ですよ、皆さん、下駄、草履、もんぺ。ここで降りてバスに乗って、乗り継いで、そして、それぞれが、それぞれの村に行くわけです。だから、学校によっては、浜大津から船で行くルートもあるし、一気にこれだけの人数が動くわけですから、同じ列車では行けない。だからいろんなルートを作って、JRで柘植まで行って、柘植からまた上がってくるというものもありますし、JR彦根から、近江鉄道で戻ってくるというなど、いろんな形で疎開をするわけです。

### “入村行進”

そして、いよいよ村に入って行くという、みんなが隊列組んで、さあいよいよという、夏の8月31日です。私が、戦後訪れたのは20年経ってからですけども、まだあったんです、私たちが寝泊まりした村の会議所が。村の人が集まって、寄り合いをするという場所なんです。



### “東方寺”

その会議所は東方寺というお寺の境内にあったんです。たまたま20年経ってから行ったらあったんです。もう今はありません。その時に撮った写真が役に立ちました。可愛いでしょ、みんな、8歳、9歳ですもんね。女性が32人、男性が32人。この写真は2箇月くらい経ってからのものですが、もう早や、帰って居ない者もいます。これ25人位しか居ない。8人くらいはもう帰っていたと思います。もう耐えられない、やっぱり身体が悪いとか、中耳炎になったとか、いろんな理由つけて、親が連れて帰るというのも、あったんですが、これは通った東押立国民学校、今、湖東第一小学校になっています。記念写真、秋に撮った。校長先生はじめ私らの先生も一緒に。全景です。これも何度も何度も、この土地へ行って、もう頭の中に叩き込んで、もう一回思い出を描こうということで、この境内の全景を描いたんですけども、これは、会場に行っていたら大きな絵として、むこうに掲げてあります。この東方寺と、右側に平之神社があります。この境内にお寺と神社があるんです。昔はこういう形はよくあったようです。

### “もらい風呂” “トンボとり”

さあ、農村生活が始まりました。何から始まるか、いろいろあります。賄いは村の方がやってくれます。お風呂をもらいに行くのは、班分けして5人、6人でお風呂をもらいに行く。夕暮れに農家のお家を訪ねながらお風呂をもらうんですが、途中でトンボとりしたり、まだこれ来たところなんで、またすぐに帰れると思っているんです。

### “五右衛門風呂”

お風呂がえらいお風呂で、皆さん、ご記憶にあると思います、またお家にあった方もあるでしょう。蒸し風呂なんです。弥次さん喜多さんの話でよくご存じだと思いますが、蒸し風呂になっていて、底が、こうして座る毎に片側が上がったり下がったりするわけで、ガッタンガッタンしながら子どもたちは、戸惑いながら。大阪の場合は大体お風呂

屋さんに行っていました。まだ、家庭風呂は普及していませんし、こんな感じはずっとお風呂をもらいに行っていたんです。この農家のお風呂というのは、洗い場が無いんです。だから何処で洗らったのか。蒸して身体を癒すという感じ。



### “寝小便”

子どもたちは大変ですよ。僕なんか一番筆頭なんですけど、寝小便たれで、家でも寝小便やったし、現実にストレスが溜まっているから、みな寝小便ばかりですよ。だから、寮母さんが大変なんです。寝とぼける子がおるし、泣く子がおるし、そんなばかりです。9歳やからね。

### “屋外にあった便所”

大体農村の便所は外にあります。家の中にありませんから、外に行かなあかん。冬は寒いは怖い、暗いしね。見ててや、見ててや言うてね、どっか行ったらあかん言うて、出るもん出えへんくらいの状態で、おしっこするわけです。

### “ブト”

朝、体操は決まって7時位から、子どもたち一斉にやるんですけども、テンツキ体操、天を衝く、一生懸命天衝く体操です。それから乾布摩擦、これは乾いた布で、タオルで、身体を擦って温める、皮膚を強くする。まあ困ったことに、農村で始めて出会ったブトという小さな小さな虫ですけども、刺されて痒い、被れる、搔いたら膿む。これは大いに悩んだ、都会の子どもたちは。薬も無いし。学校へ通っていく。当時疎開っ子が多いですから、学校の方でも受け入れが大変なんです。僕らのクラスは、2階にあった裁縫室で勉強しました。まだ、学校へ通っている時代は良いんですが。

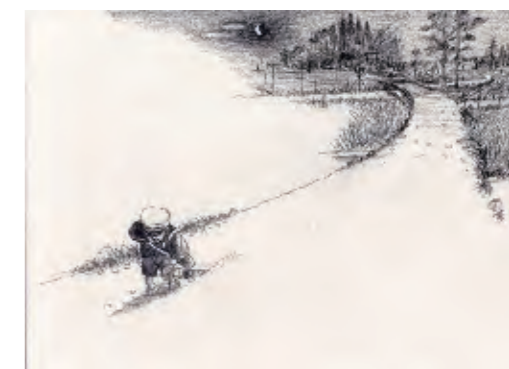
### “イナゴ取り”

農村生活、秋になると稲が実ります。そこへ害虫のイナゴが付きます。それを捕りに行

って竹筒でいっぱいイナゴを捕るんです。農家の方これを、タンパク源として昔から食べる生活してはる部分もあるんです。

### “脱走”

そういう楽しいことばかりではないんです。だんだんとおかしくなってくるんですよ。両親がいつ来てくれるか分からん、どうなってるんやろ、情報化時代ではないし、子供心にそんなもん分からんわけで、その内という話ですね。「欲しがりません勝つまでは。」ですから、戦争がいつ終わるか分からんし、もの欲しがったらいかんし、一生懸命歯を食いしばって、しかし、やっぱり大阪のお母さんが恋しいですよ。だから、月が出るとみんな本堂の縁に座って、泣いてる子もおるし、もの言わんようになる子もおるし、いろいろですね。それに耐えかねて逃げて帰るのがいるんです。もう夜、人が、いない時になったら耳すまして、いないようになる。先生が見つけて、どこ行った探せ言うてみんなが追いかけて行く。汽車の駅までは、1時間、2時間かかる所ですから、バスもない夜中に。そしたら、逃げてもすぐに捕まる。捕まって連れて帰らされるわけです。でも、こういう子が非常に多かったです。



### “祖母の面会”

私の祖母が初めて来たのが、秋ですけども、とにかく、大阪から行った子どもたちに面会は、親は、身内はまず1箇月はダメだったんです。里心をつけないよという事で、やっぱり、学校はみんなに、面会を謝絶という風に。学校が面会票をくれないと、列車の切符が買えないんです。だから、当然行けないんです。だから私の祖母がやって来たのがもう秋になってからですからね。お風呂の仲間と一緒に、この時に家から、たくさんおいしいものを持って来ます。それを、みんなに盗られんように、内輪だけで食べようということなんです。すぐ見つかって盗られるし、だから面会のあった日は、その家の子はみんな夜中にお腹痛を起こすんです、食べすぎて。それでこんな感じで外へ出て、ご馳走を食べるとい。お祖母さんが手作りのものを持って来てくれて。

### “文具”

皆さん、記憶あると思います。文房具なんかでも、ノートは使用后、一回消すんです、消して使うんです。鉛筆はちびるまで、そして、貧乏削りと言って、右も左も両方から削

るといふ、これ貧乏削りと言ったんです。今こんな言葉言うたらえらいことになりますけど、まあ当時はそうして、肥後之守でトンボの 8900 という、宝物ですよ。面会に来たらこれ持って来る、8900 言うてね、忘れませんこの黄色いトンボの。これ今売ってるんです、嬉しいですね。

### “上納”

「上納」、これは子どもにとっては、食べることが精一杯楽しいことです。で、ご飯の時に、ガキ大将から鉢が回ってくるんです。「ここへ入れ」といって。みんなちよつとずつ入れて回していくんです。それほどお腹が減るんです。子どもは普通でもお腹が減るんだから。食べるものもだんだん無くなってきています。よけいにお腹が減っていくということなんで。で、これを「上納」と私は名付けて、この時の絵を描いたんです。される側でなしに、いつも、する側だったから。

### “跡目争い”

このガキ大将が大阪へ帰るといった時に、この跡目争いがあるんです。Aグループで親分が抜けました、Bグループが、Aグループの二番手のボスをやっつけるんです。Bグループが勝って、自分が跡目争いで。なんかねえ、サル山のサルみたいですけども、子どもの世界もこんな残酷なことがあるんです。これは、集団疎開やからということではなく、現実やっぱり決められた世界のなかでは、こんなことは有り得ることです。

### “いろり”

いろりが出来ました。もう寒い寒い冬でしたから、やっとなら中にいろりが出来ました。そしたら、豆を台所から盗んでくる子がいて、5つ、6つですよ、大豆の豆を。そして、メンソーレータムの缶があるんです。そこへ入れて、いろりの中にくべて食べよる。みんなに分けないですよ。自分だけ食べるんやからね。こんな状況やから、夜中に台所行って大豆を盗むとか、もうざらにあるんです。ひもじいから。

### “虱(しらみ)”

「虱(しらみ)」、もう死語ですけどね、虱というのは。でも日本人戦後でもまだ、虱湧かして、いろいろありました。下着の縫い目の所に、ザーッと虱が卵を産み付けてあって。あまりにも不衛生なんで、進駐軍が来た時、みんなDDTを頭からバーっと白い粉ふりかけられました。阪急の駅、大阪駅、バーっと真っ白の、あれ身体によくない薬らしいですね、今、あんなもん使うたらいけないらしいですけども。それで、虱というのが、私ら体験としてある。南京虫は出ました。大阪の家でも。南京虫はあったけど、虱まではいなかった。女の子は髪の毛の中に湧かしたように思いますけど、それをどういう虱にして退治するかと、詳しくお見せしています。指の爪でプチンとやるとか、火鉢の中にくべるとか、

プチンといつて大きな音するんです。それをひとつひとつレポートしてるんです。これが、頭の中に 70 年昔に戻った時に残ってるんですね。僕の頭の中に。

### “母が来た”

やっとなら母が来ました。半年後でした。雪の中を 2 月頃でしたか、来ました。この年、昭和 20 年というのは、ものすごい雪の深い年でしたからね。もう大変な年です。その中を、一里、4 km、歩いて母が愛知川という近江鉄道の駅から歩いて来ました。弟を産んだ後、血の道で半身不随、そんな身体で来てくれた。もう待ちかねた待ちかねた、という私の気持ちを書いたんですが。下駄の跡を見てください。あっち行ったりこっち行ったり、未だか未だか、という気持ちをここで表現したんです。



### “受けたご恩”

農家、こんな形なんです。ずっと調べて回りました。当時の農村の農家は牛を動力にしていたから、今みたいにトラクターとか、そんな無いです。だから、牛を飼って、こうして横にお風呂があって、おくどさんがあって、という形なんです。私は、雪やけが酷かったんで、初めて寒い所へ行って、そして、雪やけがくずれてズルズルになっていたのを、このお婆ちゃんが登校する時に、見かねて入りなさい言うて、治療していただいた。この人のご恩に報いるために、毎年 8 月 15 日に行つて、仏前にお供えをしたというのが、私の行くひとつの目的でもあったんです。

### “雪やけ(しもやけ)”

雪やけのお医者さんが、傍にあるということで、お医者さんに行きました。足の指を、新聞紙に油塗ったのをベタンと付けてくれる。冷たいけど痛い。そういう状況で、このお医者さん、山本医院っていうのは忘れませんが。この絵好きなんです。自分で描きながら、自分で痛い足を引き摺りながら行っているんですが、なんか描いてても、そういう気

持ちよりも先に、この情景、雪の中を行ったなあという風景がね。



### “れんげ畑”

春になったら、こういうれんげ畑が寮の裏にいっぱい咲くんです。れんげが。それを後、これを鋤いて、土の肥やしにするんです。だからこの時、子どもたちは一番楽しい時期で、れんげの蜜吸ったりして、遊び回るわけです。

### “どじょう”

それから、神社の横にある川、ここには小川があって、どじょうがいっぱいいました。どじょう掬いなんか、子どもの楽しみなんです。それが食卓に出てくるということもある。

### “松かさ”

食べ物がだんだん逼塞してきました。松かさなんか食べたことがあります。あんなとこに食べるとこある、という感じですけども。これは、孢子ですから、種です。もう胡麻みたいなもんです。胡麻粒、それくらいのをいじましく捨てきて食べているという情景。これは、食糧難だったということもあったし、ひもじかった、ということもあるから、自分の頭の中にはこの風景は忘れてないです。

### “蛙釣り”

先生が蛙釣り今日やる、って言って、みんなで蛙釣り、釣って来いって。殿様ガエルです、これは。食糧難で。そんなこと、分かりません、子どもは。子どもたちは、蛙釣って来いと言われてたら、蛙釣れる、楽しいなあって言って帰ってきて。

### “蛙料理”

そしたら、先生がこうして、捌くわけです。目の前で。それをみんな見てるわけですが、

まさかこれが夕食に出てくるとは思わない。それが夕食に出てくるんです。先生も大変なんですよ、たくさんの口を満足させること。これは、我々の学校というのは、ミナミの繁華街でしょ。だから、ミナミの商売人の息子が多いで、必ず油とか、小麦粉、こういうのはどんどん送ってくるんです。先生は、それほど苦労はしなかった。これは、学校のそばにあった「北極」という店があって、そこで食用ガエルの天ぷらを売っていたのを、先生が思い出して、お前らに食べさせたんや、殿様ガエルを食べさせたと。今の子なら食べられないですよ、殿様ガエル。

### “飼育”

自分たちで、鶏とうさぎを飼うということもやりました。だから僕たち農村生活の中で、これはうさぎの餌になる、これは鶏の餌になるハコベとかそんなのは、全部頭の中に覚えています。どんな食べ物を喜んで食べるかということをね。

### “郵便ポスト”

なかには、こういう手紙を出す子がいました。手紙はすべて先生の検閲がいます。だから、勝手に手紙を出すなということなんです、親へは。それを隠れて出しよった、お母さんお腹へって来てくださって。それが大阪に届いた。お母さんが近所の人を集めてこの話をした。警察から呼び出し、こんなこと非国民だ。みんなで、こんな話をして、聞こえたらどうすんねん。ひもじいたら言うて、みんなが我慢してるんだから、えらい時代です。でもこれは、ほんまにあった、本人から聞いた話です。先生も苦労するんですよ。どないしてお米を調達しようか。ここはお米いろいろあるんです。大体一俵、大阪市内では20円、一俵というたら、60kg、当時ね。ところが、この土地に行くと、5円でありました。生産地やから今でも滋賀県は、お米の本場ですからね。



### “先生の苦労”

こういう中でも先生は、村の有力者と碁をしながら、負けたり負けたりしながら、絶対勝たへんですよ。負けたり負けたりしながら、「どうですかなあ、米一俵なんとか、もち米、正月来るし」というようなことを言いながら。そしたら、あくる日ドサッと、寮の前に置いてあったのです。先生の苦労というのも、食べささなあかん口が多だけに、大変だったのです。

### “寮での授業”

いよいよ学校へ行けなくなりました。ということは、敵機がもの凄く攻めてくるんです。八日市というインターチェンジが、今、名神高速道路の所にありますが、あそこに飛行場

があったんです。今はゴルフ場になっていると思います。その飛行場に敵機が来襲して来る。もちろん、ミッドウェーが落ちて、サイパン落ちて、だから、船の上に積んだ艦載機がどんどん来るわけです。登校中、機銃掃射で狙われ学校へ行けないから寮の中で勉強する。だから、小学校の3年から4年でね、何にも頭入っていませんよ。リットルとかキロリットルとか言うたって、僕ら全くここら辺抜けてます。そらそう、逃げ回ってるんやからね、勉強なんかどころやない。しかし、その穏やかさをちょっと表現しようとして、すずめをここに置いてみたんですよ。こんな、ほんまに見てないですよ。こういうことあったということで、自分としては入れといた方が、これ無かったら、ちょっと寂しいからね。穏やかな部分も見せとこうと。



### “防空壕づくり” “杉皮運び”

しかし、左に防空壕があるでしょ。この防空壕はもうここまで敵が来てるんですよ、という印なんです。防空壕掘っています。一生懸命、山行って杉の皮取って来て、この中の内装の貼りものにして。そして私たちは、ここでもし何かあったらここへ入って、隠れなあかん。もうどんどん敵機は来ているんです。なにが農村地帯で豊かでしっかりした、という時代じゃもうないんです。戦争がそこまで来ているんです。現に香川県辺りに行っていた此花区の高見小学校の子どもたちが、もう危ないから、二次疎開ということで滋賀県のここまで来ました。そんな時代があって、もう移動するんです。疎開に行った土地が危ないから、みんな。

### “大阪が焼失した日”

いよいよ来ました、昭和20年3月14日、忘れもしない日ですよこれ、大阪の大空襲。私は、集団疎開地におりましたんで、難を逃れましたが、家は全部焼けましたから、大阪。僕の家もきれいに焼けて、父や母や祖母やらみんなが、弟もそうです、兄もそうです、逃げ回ったということです。だからどんどんどんどん大阪が灰になっていくと。そして、焼け死んでいくともいっぱいあるんですよ。大阪はもう50回にも及んだ空襲があったということで、1万5千人が、死亡・行方不明者。3月13日から14日未明とね、一番大きかったです。もう戦争の末期は京橋辺りにも落ちたし、たくさんの方が亡くなっていくわけです。で、うちの6年生、みんなそうですけれども、どこの学校も全部大阪へ卒業式があるから帰ったんです。ところが、その14日が卒業式やった、その日に大阪が焼けてしまっただけで、卒業式できなかつた。だから、あれやったら、帰らんで良かったんちゃう、なかに亡くなった人もあるでしょうから。

さあ、宝塚、私たち今宝塚におります。宝塚は良い街や、華やかな街や静かな街や、そ

んなこと無かったんですよ、宝塚だって戦争の中では非常に我慢せなあかん時代やったんです。西宮、尼崎、第二阪神工業地帯ということで、よう言われますよね。いろんな物を作ってました。しかし、この街は未だ静かな所。ところが、昭和13年頃から、昭和ベアリングっていうのがあった。これは、東洋ベアリングの子会社やったそうですが、後に合併してまた、東洋ベアリングになるんですけども。もう一つ昭和16年に川西航空機宝塚製作所というのが出てきます。それはどこかというたら、仁川の競馬場。あそこに大きな工場ができます。ここは何を作っていたかという、海軍の飛行機を作っていた。70棟に及ぶ大きな建物がいっぱいあったそうです。その中で、海軍の飛行機を作っていた。それは、当然狙われますよ。だから、この川西航空機は歴史も古い所ですが、鳴尾にも作り、そして昭和16年にこの宝塚の競馬場の所にもってきたんです。そこに勤める人が多いから、いわゆる小林と仁川の間に鹿塩という停留所を作った程やと、宝塚市の歴史に書いてあります。それでこの仁川の競馬場の所には関西学院、神戸女学院、県立伊丹中学校、それから伊丹第一中学校の学生たちが学徒動員でやって来ました。動員といたら、そういう風にしてそういう所で働くために引っ張り出されるということなんです。中学生以上。そしてまた、小林の聖心女学院、宝塚音楽学校の生徒たち、これが、女子挺身隊として働いた。すみれの花どころじゃないですよ。そこへ行って働く。挺身隊というのは、そういう団体名ですけども、大劇場は3月4日に閉鎖、そのあと、6月だったかな、海軍が4,000人入るんです。そんな時代でした、宝塚だって。遊園地はちょっとあったみたいですけど。宝塚のゴルフ場も、競馬場に移すとかいろんな話があったみたいで、とにかく宝塚ももう普通の状態



ではなくて、だから、大劇場に4,000人近い海軍将兵たちがいて、そこから、各地に派遣されて行って、いわゆる特攻隊として出て行く人もおるということなんです。空襲がありました。7月24日、B29と小型の艦載機が、150機やって来て、それから、川西航空機にどんどん攻めて来るわけです。結局はここで約100人超した死傷者が出るということがあったようです。もちろん内訳は知りませんが、先ほどの若い人たちの命がここで、亡くなった、ということも、記録では残っています。ほかに、仁川、段上、段上言うたら仁川競馬場の南ですね。それから、神呪、これは門戸厄神。良元村、と言ったら、武庫川の右岸。その辺に全部空襲が来て、たくさんの方が死んでると。というようなことで、宝塚だって、いつまでも平和な田園都市ではないということでした。

そんな頃僕たちは、大阪が焼けたということを、風の便りで聞きました。今みたいに毎日、テレビでこんな事件があったなどいろんなことを言うわけではない。だから風の便りと言うか、村の人がラジオで聞くんでしょうね。村の人がそれを知らせてくれる、「大阪焼けた。えらいこっちゃなあ」言うけど、実感として無いわけ、9歳ですから。ひなたぼっこ

しながら、えらいこっちゃ、大阪焼けたらしいでという。自分の家がなくなったのも分かってない、まだ。その状況は頭の中、覚えていますから、一番にこの絵描いたんです。ひなたぼっこしながら、ぼけっとね。

### “飛行雲”

でも、現実には凄惨な現実だったんです。そして周辺も見えていますと、空にB29がどンドンどンドン行くんです。金沢、名古屋、岐阜、その辺へ攻めに行く飛行機が、もう鮮やかに見えるんです。忘れないですよ。だから、自分の頭の中にあつたものを絵にしました。



### “空中戦” “体当り”

さあ、いよいよ頭の上で戦争が始まりました。八日市飛行場へ攻めて来たグラマン、それを、隼（はやぶさ）が下から迎え撃ちに行き体当たりするんですよ、上で。ドッカーンと。朝ごはんを僕ら食べていたんです。そしたら上でもの凄惨な大きな音が、ドッカーンとしたと思ったら、地が揺れて、私たちみんなが走って外を見に行ったら、先生が怒って、「座れ、座れ」と。腰抜かした子もおるし、もういろいろ。

### “落ちたエンジン” “松根油”

それで、後で見に行ったら、50m離れた所にエンジンが落ちていた。これグラマンのエンジン。もうちょっとこれが、それでしたら、まともに寮の上に来るわけですからね。戦争は平和な村やってと言っても、ここまで来た。私はこれを描きながら、えらい所に落ちたなあ、と身震いしました。

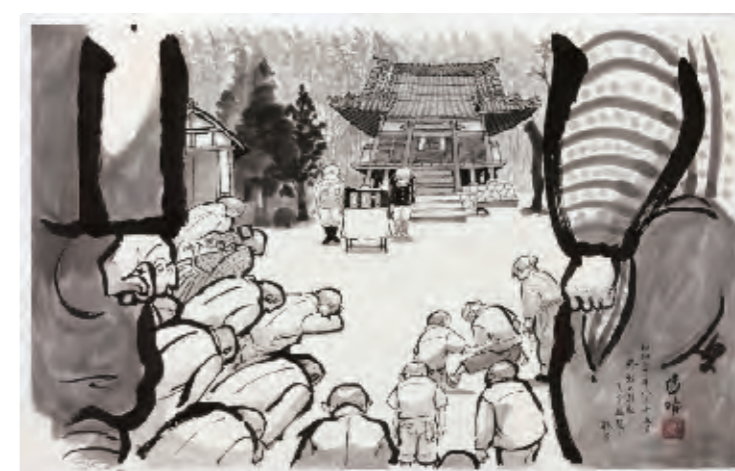
松の根っこで油作って飛行機のエンジンのガソリンの代わりにするという、馬鹿げた事を、考えよった。これもやったけど、できんかったですね。

### “英霊”

村から兵隊として出て行った人が、寂しく帰って来る、お骨になって帰って来られる。この状況、忘れられないです。だから、この状況をどう描こうか、正面から書いた絵もあるんですけども、いや、そうじゃないわ。この人たちの悲しみみたいなものを、こんな表現はできないな、やっぱり、こういう風に、木立があって、私たちの生活した場で、見送った人たちが、こうして帰って来るという情景ね。ここにも、戦というものが身近に感じられるわけですよ。

### “ついに終戦”

そして、1945年8月15日、今日は、天皇陛下のラジオ放送があるから、みんな聞くように、村人が言ってきて、そして私たちは並んで聞きました。全然分からん放送でした。何のことか分からん、言うてたら、横から村人が「敗けたんや、泣け」。「泣け言うてるから、泣こか。」、子どもたちは無邪気ですからね。そんなことしながら、ついに終戦になるわけです。8月31日に行き、1年足らずで。もちろんこの終戦のためには、大きな犠牲がいっぱいあったんです。戦地に散った人、それから広島、それから長崎、原爆の犠牲になった人。それから大阪の街や各地で犠牲になった人、宝塚の川西航空機の中で犠牲になった人、いろんな犠牲の人があって、ついに終戦なんです。



### “帰郷”

私たちは守られたんです。だから、やっと父と兄が迎えに来まして、私は一足先に帰るんですが、あとに残ったのは全部まとめて帰る、言うても学校はもう無いんです。学校へ帰って来ても学校は無いんです。そんな状況の中で私たちは、一応命を長らえさせてもらって、故郷へ帰るといことになるんですが、出発した時の家はもう無いのです。疎開先ですよ、父、母の。そういう状況の中でやっぱり、集団疎開というものを、僕は頭の中に、心の中にずっと持ち続けて、70年経ったんです。そして、その都度都度、毎年8月15日には、この境内に行き黙とうし、そして、お世話になったお婆ちゃんのお墓にもものを供え、そして、その土地にいる友達と出会う話をし、ということ。ここは、自分で戦前戦中戦後過ごしてきた人間の80年の歴史の中で、僕の原点があると、思っています。だからここで過ごして、人間が変わり、人格も変わり、今日生きていると、原点であると。

それは、もちろん戦後があって、アメリカの文化がどんと波のように押し寄せてきました。敵国の音楽と言われていたものがジャズといわれ、アメリカの文化映画が入り、西部劇が入り、どンドン世の中、日本人は変わっていくわけですけども。立つものを食べるな、といわれた僕たちにとっては、電車の中で、もの食べているとか、許されないことあ



るんですよ。言えないけど。ものの尺度が違うから。今生きている人は、今の時代のいわゆるヤーデーじかなんか知れませんが、我々は尺貫法ですからね。なんせそういう時代の尺度を持って年寄りが、「お前らあかんやん」と若い子に言ったって、通じるわけない。生活が違う、時代が違う、ということなんですよ。

それで私は、1993年にその故郷という疎開先に植樹に行ったんです。これは私たちの生きた証し、場所であると。ここに何かを残さないといけない、ということで。

そして、左側の先生です。もう非常にお齡を召しておられます。中の3人が疎開児です。その隣に寮母さん、それからもう3人います。こういう所へ行って記念植樹をやりました。これが、今日まだ綺麗な花を咲かすんです。毎年毎年ここで、この子どもたちが、こういう風にして生きたという証しをね。私は絶対残したいと思ったし、残さねばならないと思った。時代が変わっても、ここに生きている、守られた子どもたちが、たくさんいたということです。村人、先生、寮母さんとか、いろんな大人たちが、私を守ってくれた、私たちを守ってくれた。それを忘れたらいかんと思いますね。これは私の文字で「愛」「平和」というのを、向こうの桜の根元に置いてきました。ちゃんとこれは今もしっかりと残っています。だからこういうことを考えて、突然の「時空の旅」を描きだしたんです。そして、この「時空の旅」が、どういう風に、ひとつの展覧会としてできるかというのを、また現場へ行ってスケッチし、そして、なんばパークスで、「学童集団疎開70年」というのを、ひとつの節目の年に、一昨年、展覧会をしました。自分がスタートした場所、8月31日という日にち、忘れないでここから始めようということで、この展覧会を始めたんです。全部で77点、先ほどから見ていただいている絵も含めてあります。その、なんばパークスにどれだけの人が来てくださったか、もちろんメディアの力もいただきましたし、3,000人、一週間で。どれだけの人がここに来て泣いて、思い出して、語り合っ、そしてみんなで良かったなあ、今の平和良かったなあ、という話をずっとしておられるんです。凄いでしょこの数、正倉院の御物見るみたいでしょ。並んで。じわじわ、じわじわと動きはるんです。みんな動かはれへんのです。立ち去れへんのです。この状況を見て、この絵を見て。私はね、60年絵を描いてきましたけど、自分の絵がこれだけ人さまを感動させるのか、というのは感じたことはなかった。それが、今この年齢になって、肩の力が抜けて、自分の体験を、皆さんに自分の思い出として、見ていただくということで、始めたんですが、ところが如何せん、自分の思い出ではないんです。皆さんの思い出やったんです。皆さんが共有してくれはったんですよ。すばらしいことやなあ自分では驚いているんです。これだけやないんです。滋賀県でもこの展覧会を開いたんです。滋賀県も各地で、集団疎開先です。集団疎開先の東近江市でふたつの図書館と、博物館でやったんです。この時には現地の子どもたちが来てくれた。中学生、小学生が来て、授業として、みんな来てくれたんです。で、向こうにいる隣村の野村君というのが、同じ世代なんです。それで、



彼は、川西市から縁故疎開でお祖父さんの里に行ったまま居ついたんです。彼は、同じ世代ですから、それを一つ一つ丹念に子どもたちに、この絵を見ているような説明をしてくれた。で、子どもたちもここで共感して、そして平和というのはこうやとか、昔のお風呂はこうやったのとか、昔の村はこうやったとか、ということの一つずつ、自分のために役に立っていつているんです。私は本当に絵を描いて、一番冥利につけるなあと思うんです。能登川の博物館では、ほんまもんの五右衛門風呂が並びました。子どもたちが来て、この絵とこれを比べて、ああほんまや、これやな。今は自分の所ガス風呂やけども、昔のお祖父ちゃん時代はこんな風呂やってんな、というのがあって。体感してもらえるわけですよ。歴史というのはこういうもんだと思うんです。そして、いつか誰かが、次の時代に語り継いでいかなあかん、そういうことだと思っんです。この風景いまでも変わっていません。僕たちが集団疎開していた時とほんとに変わってないです。農村地帯でお米も豊かに獲れます。まあ、小川が護岸工事ができて、魚がいなくなったとか、いろいろありますけども。でも、本当に風景として、佇まいとして、今でもこうして残っているという所に私は感動するわけです。そして、平和というものが、こうありたいなあと思っんです。



今回この「平和特別講演会」、宝塚市のお世話で、展覧会場もお借りしてですね、みなさんの前で披露できるというのは、私は非常に光栄に思っんですし、嬉しく思っんです。ただまあ、現実にはあちらこちらで、開展して子どもたちにその種が落ちてるんだなあ、と。声高に僕は平和やとかを言わないんですけども、これを見てもらったら、

現実どうかとお分かりになっていただけるんじゃないか。つらい時代を越してきた人にとっては、今の子は幸せやと思っんです。だって、平和っていうのは、日常が変わらないことだと、僕は思っんです。皆さんこの地域で、阪神淡路大震災に遭われた方も多しと思っんです。その時、ガスが止まり、電気が止まり、何もかもが止まって、昨日と今日、違うことを一生懸命やらあかん。お風呂屋さんに行かなあかんけど、どうする。ということが、非日常としてあったわけです。日常というのは、昨日と今日と同じですわ。つまらんなあ、同じやけど、しょうもないなあ、ということが一番幸せなこと、というのは平和であるということなんです。それを、皆さん気付いていただきたい。いつも同じことやから嫌やからと、今日はあっち行って、こっち行って、何を食べてというようなことが、必ずしも幸せではないと思っんです。もちろん、お金出せば何でも買える世の中ですよ、今。だって、「チン」で、1秒でお湯も沸くし、3分もありや、もう充分ですよ。昔はかんできで火をおこして、1時間経たんとお湯沸かへんかったんやからね。それほどの時代がもう目まぐるしく変わってるし、個人の電話、全部、今お手元にお持ちやと思っんですけども、こんなことで、外の人とすぐ電話できるというのも、まあ本当にえらい時代やと言ええら

い時代。ありがたい時代やと言えば、ありがたい時代。でもやっぱり、こういう形で皆さんに絵を見ていただいて、ともに共有していただいて。また、若いお母さんや子どもたちは、やっぱりそれに伴って、次の時代のためにそれを学んでいただいて、次の時代にそれを伝えていただかないかんという気持ちで、私は展覧会を開いております。たまたま宝塚市が、どうぞやってくださいとおっしゃっていただいて、やらせていただいておりますが。やっぱりこれは、私の気持ちとしては、あと13都市。去年は東京ではやりました。横浜とか、横須賀とか、川崎とか、名古屋とか、神戸もまだですね。尼崎もまだですね。

だから、こういう風にしていくとね、ヨーロッパの疎開児たちというのを見て来て、武官として、疎開をさせないかんという、おっしゃった。武官たちがヨーロッパへ、僕は行けと言っている気がするし、自分でも行って、向こうの疎開児たちと語り合いたいという気持ちもあります。絵は万国共通ですからね。言葉は難しいですけども。まあ、そういうことで、今度のこの画集というのを外で売っておりますが、この画集も、英語を入れています。誰かが、外国の人がちょっとでも見てくださったらなあ、と思って英語を入れているんです。



これは、いろんな記録を、後ろにこの本の中に入れてあります。特別な記録を、どこの学校が何人どこへ行ったか。これは、山本仁一さんという、予科練から帰ってきた方が、滋賀県の大津におられた。この人が、学童集団疎開児も戦争の被害者であるということで、熱心に全部洗い出してくださったんです。滋賀県下における集団疎開児ということで、それを纏められた。その方と僕は偶然知り合ったんで、その人の資料を送っていただいて、それをこの本の中に入れたんです。いろんな方が寄せていただいています。言葉も寄せていただいています。いろんな人が入っています。桂文枝、前の三枝さんも書いていただいています。やっぱり、あの人は戦争体験者というよりも、お父さんが亡くなってはるんですよね、戦争で。そんなこともあって、彼も共感を得てくださったんで、一番文頭に書いていただいています。あくまでも、私の場合、先ほどから言いましたように、やはり平和。これは、どの時代にも通じるものだと思うんです。だから、そういう面では、宝塚市非核平和都市宣言というのを、平成元年でしたかね、出してはります。あとは、核兵器廃絶の条例も出してはりますし。まあ、どこもそうでしょうけど、願っているのは、そういうことであると思います。今日はこういう話で、私の「時空の旅」展を今、宝塚南口のセ

ンターでやっておりますので、ぜひ、ご覧くださいませよう。良い会場ですよ。絵も良いですがね。これは自画自賛ですみません。まあしかし、「故郷」の歌も良かったですね。皆さん合唱なさって。どうでしょうか、何か質問があれば、まだ、10分ほど時間がありますが。心触れるところやと思いますよ、皆さんもね。ご同感いただいたと思いますし、ちょっと心配しとったんですよ。広いホールでね。何人来てくれはるんかなあという心配もしてましたし。主催者の方も、どうでしょうかねえ、と言うて、心許ない返事をしてはったんです。ありがたいことです。これだけ、皆さんに聴いていただいたら、そしてあと、見てこられた方もあると思いますけども、まだの方は是非、今から私も行きますので、よろしくお願ひしたいと思います。質問が無いようでございますから、はい、ありがとうございました。(拍手)

## 非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わずにはられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（1989年）3月7日

宝 塚 市

